



ILCAA
Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa
2010



目次

所長あいさつ	02
--------------	----

概要

AA研の研究活動	04
研究・運営体制	05
研究組織構成	07
研究連携ネットワーク	08
研究スタッフ	09

共同研究

基幹研究	12
共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)	13
ネットワークの構築	18
大型プロジェクト	19
既形成拠点	20

研究資源

アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源	22
出版物	22
海外研究拠点	23
音声学実験室	24
文献資料コレクション	24

研究者養成

研究者養成のための事業	26
言語研修	27
Documentary Linguistics Workshop (DocLing)	27
中東☆イスラーム関連セミナー	28
コーパスに基づく言語学教育研究拠点(CbLLE)	29
Fieldling フィールド言語学コミュニティ	29
アクセスマップ	30

付録: 関連資料



アジア・アフリカ言語文化研究所所長
栗原 浩英

所長あいさつ

本研究所は、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を目的とする全国共同利用研究所として1964(昭和39)年に設置されました。それ以来46年間、国内外の研究者との共同研究の展開、海外学術調査の実施と総括、研究資料の蓄積と公開、言語研修など研修事業を通じた若手研究者養成への寄与、辞典編纂などを通じて、日本のアジア・アフリカ研究をリードし、その発展と深化に大きな役割を果たしてきました。本年度からはこれまでの成果を継承・発展させるべく、本研究所は新たに発足した「共同利用・共同研究拠点」制度の下で、より一層国内外に開かれた「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として新たなスタートを切りました。

さて、アジア・アフリカとは広大で、多様性に富み、あらゆる点で奥の深い地域です。その中には近年著しい発展を遂げ、政治的・経済的に発言力を増大させている国や地域がある一方で、紛争と貧困から脱却できずにいる地域もあります。このアジア・アフリカに地球人口の70%を超す人々(約48億人)が暮らしていることを考えれば、その動向が日本のみならず地球社会の未来を大きく左右することになるといっても過言ではないでしょう。このような重要性をもつアジア・アフリカを根本から理解するためには、本研究所が創立以来と取り組んできたような、アジア・アフリカの言語文化の深層に食い込んだ研究をさらに発展させることが求められる所以です。

とはいえ、広大かつ多様で、奥の深いアジア・アフリカを研究するためには、本研究所のスタッフだけでカバーしきれものではありません。研究所の枠、さらには本研究所が附置されている国立大学法人東京外国語大学の枠を越えて、国内外の広範な研究者コミュニティからの協力を得ることが必要不可欠です。同時に、研究者コミュニティの要望を反映させながら、研究所として重視する領域を明確にするために、本年度から4つの基幹研究—「言語ダイナミクス科学研究」、「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」、「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」、「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探究」—を開始します。今後とも、本研究所は国内外の研究者コミュニティとの連携強化・拡大を進め、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」の名にふさわしい活動をする所存です。皆様のより一層のご指導・ご支援をお願い申し上げます。

概要

人と人をつなぎ 新たな認識をひらく





研究・運営体制

共同利用・共同研究拠点である本研究所には、研究者コミュニティの意向を運営に明確に反映させ、拠点としての機能を適切に遂行するために、所外の研究者を含む以下の委員会が置かれています。

運営委員会

運営委員会は、所外委員(AA研の共同研究の主要分野の研究者等)とAA研内部から選出された委員によって組織されます。運営委員会は、AA研の共同利用・共同研究の重要事項および研究活動全般に関する協議を行います。

2010(平成22)年4月1日～2012(平成24)年3月31日の委員は次のとおりです。

岩下 明裕(北海道大学スラブ研究センター長/教授)

熊本 裕(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

栗林 均(東北大学東北アジア研究センター教授)

佐藤 洋一郎(総合地球環境学研究所教授)

瀬川 昌久(東北大学東北アジア研究センター教授)

竹中 英俊(東京大学出版会編集局長)

富永 智津子(元・宮城学院女子大学学芸学部教授)

長野 泰彦(国立民族学博物館教授)

渡邊 興亜(総合研究大学院大学監事)

栗原 浩英(AA研所長)

飯塚 正人(AA研副所長/フィールドサイエンス研究企画センター長)

三尾 裕子(AA研情報資源利用研究センター長)

黒木 英充、深澤 秀夫、町田 和彦(以上、AA研)

共同研究専門委員会

共同研究専門委員会は、所外委員(AA研の共同研究の主要分野の研究者等)とAA研内部から選出された委員によって組織されます。AA研が公募する共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)の審査および実施中の共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)の評価を行います。

2010(平成22)年4月1日～2012(平成24)年3月31日の委員は次のとおりです。

北川 勝彦(関西大学経済学部教授)

倉沢 愛子(慶應義塾大学経済学部教授)

栗本 英世(大阪大学グローバルコラボレーションセンター長/教授)

清水 展(京都産業大学文化学部客員教授)

庄垣内 正弘(京都産業大学文化学部客員教授)

林 徹(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

水島 司(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

横山 伊徳(東京大学史料編纂所教授)

栗原 浩英(AA研所長)

飯塚 正人(AA研副所長/フィールドサイエンス研究企画センター長)

三尾 裕子(AA研情報資源利用研究センター長)

黒木 英充、深澤 秀夫、町田 和彦(以上、AA研)

研修専門委員会

研究所の主催する言語研修およびその他の研修事業に関する専門的事項について、所長の諮問に応じます。

2010(平成22)年4月1日～2012(平成24)年3月31日の委員は次のとおりです。

岸田 文隆(大阪大学大学院言語文化研究科教授)

高橋 明(大阪大学世界言語研究センター長/教授)

林 徹(東京大学大学院人文社会系研究科教授)

吉田 和彦(京都大学大学院文学研究科教授)

澤田 英夫、高島 淳、豊島 正之、中山 俊秀、稗田 乃、

町田 和彦、峰岸 真琴、渡辺 己(以上、AA研)

海外調査専門委員会

本研究所が行う海外学術調査総括班事業および海外学術調査に関する専門的事項について、所長の諮問に応じます。

2010(平成22)年4月1日～2012(平成24)年3月31日の委員は次のとおりです。

伊藤 元己(東京大学大学院総合文化研究科教授)

梅崎 昌裕(東京大学大学院医学系研究科准教授)

岡本 正明(京都大学東南アジア研究所教授)

木村 秀雄(東京大学大学院総合文化研究科教授)

窪田 順平(総合地球環境学研究所研究部教授)

曾我 亨(弘前大学人文学部准教授)

高樋 さち子(秋田大学教育学部准教授)

星野 洪郎(群馬大学大学院医学系研究科教授)

安成 哲三(名古屋大学地球水循環研究センター教授)

本山 秀明(国立極地研究所教授)

飯塚 正人(AA研副所長/フィールドサイエンス研究企画センター長)

石川 博樹、椎野 若菜、中山 俊秀、西井 凉子(以上、AA研)

編集専門委員会

研究所の出版・広報の方針の設定及び出版物の審査などに関して所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

2010(平成22)年4月1日～2012(平成24)年3月31日の委員は次のとおりです。

石川 登 (京都大学東南アジア研究所准教授)
 梶 茂樹 (京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授)
 新免 康 (中央大学文学部教授)
 鷹木 恵子 (桜美林大学国際学部教授)
 森口 恒一 (静岡大学人文学部教授)
 吉澤 誠一郎 (東京大学大学院人文社会系研究科准教授)
 河合 香吏、呉人 徳司、高松 洋一、クリスチャン・ダニエルス、津田 浩司、稗田 乃 (以上、AA研)

国際諮問委員会

国際的な視点から共同利用・共同研究に関し、所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

2010(平成22)年4月1日～2012(平成24)年3月31日の委員は次のとおりです。

LAU, Ulrich (Privatdozent, Heidelberg University)
 ASSUNÇÃO, Carlos Costa (Professor, University of
 Tras-Os-Montes E Alto Douro)
 BEHREND, Heike (Professor, Institute of African
 Studies, University of Cologne)
 DOMII, Tumurtogoo (Director, Institute of Language
 and Literature, Mongolian Academy)
 REBOUL, Anne Colette (Director, National Center for
 Scientific Research)
 陳 麗君 (Assistant Professor, National Cheng Kung
 University)
 GROSSHEIM, Martin (Lecturer, Passau University)
 陳 劍 (Professor, Fudan University)
 黒木 英充、芝野 耕司、陶安 あんど、床呂 郁哉、中見 立夫 (以上、AA研)

海外拠点専門委員会

本研究所の海外拠点における共同利用・共同研究に関して所長が必要と認める事項について、所長の諮問に応じます。

2010(平成22)年4月1日～2012(平成24)年3月31日の委員は次のとおりです。

内堀 基光 (放送大学教養学部教授)
 奥田 敦 (慶應義塾大学総合政策学部教授)
 私市 正年 (上智大学アジア文化研究所教授)
 酒井 啓子 (東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授)
 谷口 淳一 (京都女子大学文学部准教授)
 長沢 栄治 (東京大学東洋文化研究所教授)
 飯塚 正人、黒木 英充、床呂 郁哉、錦田 愛子 (以上、AA研)

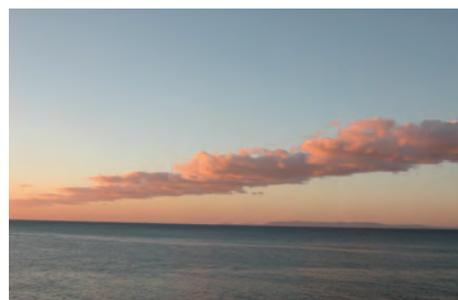
中東研究日本センター諮問委員会

レバノン共和国ベイルート市に設置された中東研究日本センター (JaCMES) の活動について、重要な事項を審議するための国際的な視点から助言を得るための国際諮問委員会を設置されています。

2010(平成22)年4月1日～2012(平成24)年3月31日の委員は次のとおりです。

ABDUL-RAHIM, Abu-Husayn (Professor, Faculty of
 Arts and Sciences, American University of Beirut)
 MASSOUD, Daher (Professor, Faculty of Literature
 and Human Sciences, Lebanese University)
 KHALIL, Karam (Vice-President, Saint Joseph
 University)
 黒木 英充 (AA研)

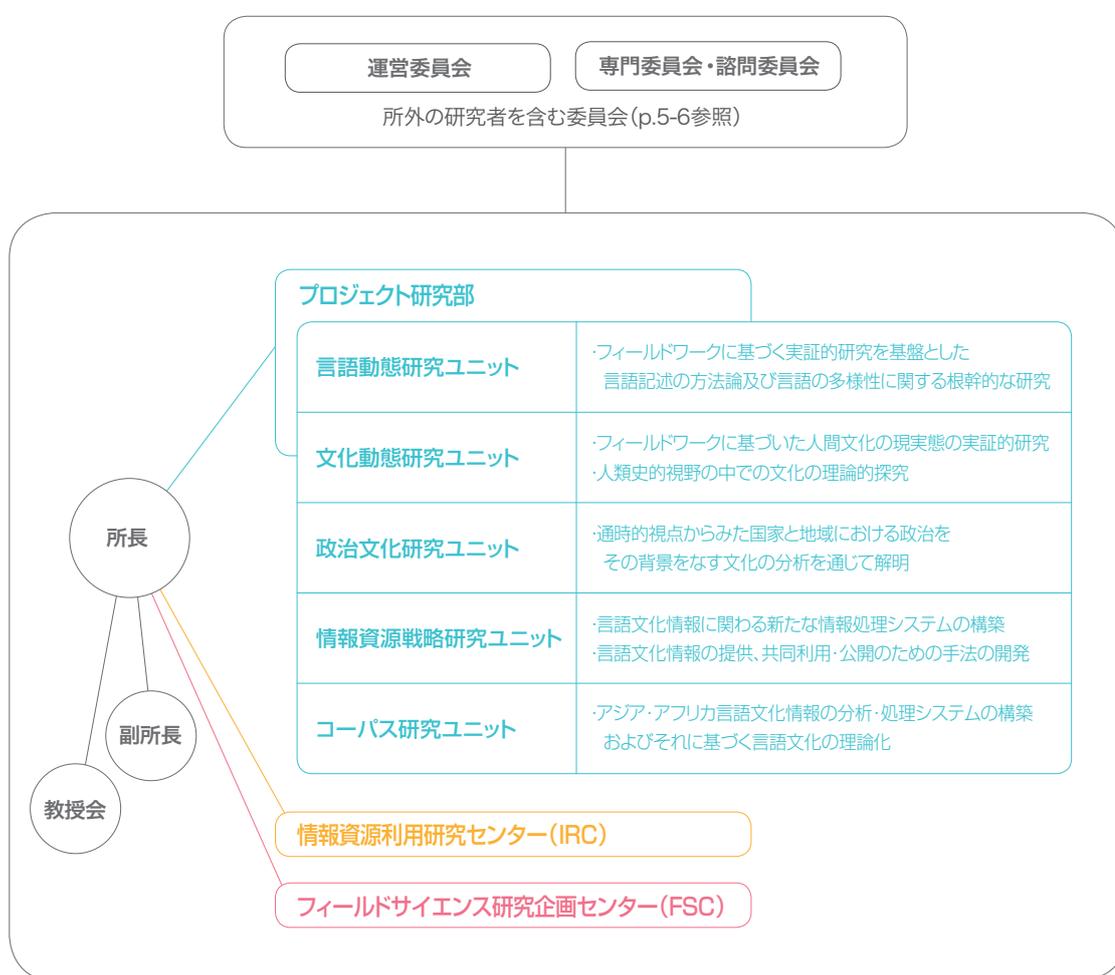
研究組織構成



研究組織構成

本研究所は5つの研究ユニット(言語動態、文化動態、政治文化、情報資源戦略、コーパス)から成る1プロジェクト研究部および2つのセンター(情報資源利用研究、フィールドサイ

エンス研究企画)という組織体制をとっています。所員はいずれかのユニットまたはセンターに所属し、共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)や個人研究を進めながら、国内外の研究者との密接な協力に基づいて、共同利用・共同研究拠点にふさわしい活動を推進しています。



情報資源利用研究センター (IRC)

情報資源利用研究センター(略称:IRC)は、アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発・国際学術交流を推進するAA研の附置センターです。例えば、さまざまな資料のデジタル化やデータベース化の支援や公開、またその方法論の開発を行っています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/>

フィールドサイエンス研究企画センター (FSC)

AA研の研究活動の特徴づけてきた臨地調査の手法をより実践的・理論的に洗練して、さまざまな学問の領域を横断する「フィールドサイエンス」という「現地学」を構築するとともに、臨地調査に関わる研究者間の連携を担うことを目的としています。また、2つの海外研究拠点を維持・運営しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/>



研究連携ネットワーク

本研究所は、広くアジア・アフリカの言語学・歴史学・人類学・地域研究の研究を行う研究者・次世代研究者のネットワークの中核になっています。

組織や国の枠を越えた共同研究を進めるとともに、より広い視野でネットワークを形成・維持するため、主に次のような活動に取り組んでいます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/>

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)

所内外の研究代表者のリーダーシップのもとに、所員と所外の研究者が共同で行う研究プロジェクトです。

今年度実施されるプロジェクトについては、p.13以降をご参照下さい。

海外学術調査総括班/フィールドネット

「海外学術調査総括班」は、1975(昭和50)年以来、AA研に事務局をおき、科学研究費補助金(海外学術調査)にかかわる研究者間、および研究者側と文部科学省/日本学術振興会との間の情報交換、連絡調整などに当たってきました。海外学術調査の研究者間の情報交換を目的としてAA研が取り組んでいる研究連携事業の1つです。

オンラインによる情報交換サイト(「フィールドネット」)も運営しています。

学術交流協定

海外の研究機関と協定を結び、研究資料・情報の交換、研究者の相互交流、共同研究・調査等の国際的学術交流を推進しています。

友の会

これまでにAA研に所属した研究者との関係を維持し、国際的なネットワークを形成することを目的として「友の会」を設置しています。

地域研究コンソーシアム(JCAS)

「地域研究コンソーシアム」とは、地域研究に関わる全国の組織のネットワーク形成を目指している、アカデミック・コミュニティに立脚する新しい型の組織連携です。AA研は、本コンソーシアムの幹事組織としてその運営に積極的に参画しています。

<http://www.jcas.jp/>



研究スタッフ

【専任教員】

本研究所に専任で所属し個々の研究を行うほか、アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同利用・共同研究拠点の機能を十分に発揮するために共同研究等を組織することによって、研究者コミュニティへの情報提供を行うとともに、国内外の研究者をつなげる役を果たします。

【外国人研究員】

本研究所では、共同研究やさまざまな研究活動を通じた交流と学術研究の推進を図るため、6ヶ月～1年間の期間で外国から研究員を招へいしています。例年、4～6名の研究員を招へいしています。外国人研究員には「客員教授」または「客員准教授」の称号が与えられます。

言語動態研究ユニット

教授	稗田 乃	アフリカ言語学
准教授	呉人 徳司	言語学、チュクチ語
准教授	塩原 朝子	インドネシア諸語
准教授	星 泉	チベット語
客員教授	BEHREND-ENGELHARDT, Heike Helga Dorothea	人類学
客員教授	DOMII, Tumurtogoo	モンゴル語学

文化動態研究ユニット

教授	深澤 秀夫	マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学
教授	宮崎 恒二	オーストロネシア諸社会の研究
准教授	河合 香吏	人類学、東アフリカ牧畜民研究
准教授	高知尾 仁	世界表象と象徴性

政治文化研究ユニット

教授	クリスチャン・ダニエルズ	16～20世紀中国史における社会、経済および技術
教授	中見 立夫	内陸・東アジアの国際関係史
准教授	近藤 信彰	イラン近世・近代史、ペルシア語文化圏の歴史、法廷文書を利用したテヘランの社会史
准教授	陶安 あんど	法社会学、中国法制史、中国古文字学
客員教授	LAU, Ulrich	中国古典文献学

情報資源戦略研究ユニット

教授	豊島 正之	中世日本語文献学
教授	ペーリ・バースカララオ	南アジア諸言語、音声学
准教授	荒川 慎太郎	西夏語学、西夏語文献学
准教授	伊藤 智ゆき	音韻論、中期朝鮮語、中国語中古音
客員教授	ASSUNÇÃO, Carlos Da Costa	文法学史、宣教に伴う言語学

コーパス研究ユニット

教授	中谷 英明	インド仏教学、中期インド語学、総合人間学
教授	芝野 耕司	マルチメディア・データベース論、多言語処理論
教授	峰岸 真琴	オーストロアジア諸言語
准教授	高松 洋一	オスマン朝史、古文書学、アーカイブズ学

情報資源利用研究センター

教授	三尾 裕子	東アジアの人類学
教授	小田 淳一	計量文献学
教授	栗原 浩英	ベトナム現代史
教授	高島 淳	ヒンドゥー教、言語情報処理
教授	永原 陽子	南部アフリカの歴史
教授	町田 和彦	インドのことば
准教授	澤田 英夫	カチン州および東北インドのチベット・ビルマ系言語
准教授	渡辺 己	セイリッシュ語
助教	津田 浩司	東南アジア島嶼部(特にインドネシア)の華人社会研究

フィールドサイエンス研究企画センター

教授	飯塚 正人	イスラーム学
教授	黒木 英充	東アラブ近・現代史
教授	西井 涼子	東南アジア大陸部の人類学
准教授	太田 信宏	インドの歴史
准教授	椎野 若菜	社会人類学、東アフリカ民族誌
准教授	床呂 郁哉	東南アジア島嶼部の人類学
准教授	中山 俊秀	ワカシュ諸言語(北米北西海岸)、 言語類型論、言語人類学
助教	石川 博樹	サハラ以南アフリカ史
助教	錦田 愛子	イスラエル／パレスチナ紛争、 中東地域研究、難民研究

【特任研究員・非常勤研究員】

本研究所の専攻分野について高度な研究能力を持ち、将来、学界での活躍が見込まれる若手研究者を、一定期間にわたり本研究所で雇用し、研究活動に参画してもらいます。

特任研究員	小田 昌教	文化人類学、現代美術、 メディア・アクティヴィズム研究
特任研究員	長崎 郁	記述言語学、ユカギール語
非常勤研究員	梅川 通久	地域情報学、地理情報分析
非常勤研究員	福島 康博	イスラーム金融、 マレーシアの社会経済
非常勤研究員	吉村 貴之	アルメニア近現代史

共同研究

人と人をつなぎ 知と知をつなぐ場



基幹研究

共同利用・共同研究拠点である本研究所の中期的研究戦略の柱として、研究所内で自発的に組織された研究班によって展開される共同研究軸です。2010(平成22)年度から3年の計画で以下の課題が基幹研究として設定されました。
<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

【言語ダイナミクス科学研究】

代表者: 中山 俊秀

本基幹研究は、①言語多様性の記録のための研究活動(Language Description & Documentation)の活性化と、②言語運用と変化の実際、言語の多様性の実際を踏まえた、ダイナミックな現象・システムとしての言語の研究(Linguistic Dynamics Science)の新展開を目的として組織された。具体的には以下のような活動を通して関連研究を先導していく:

- ・危機言語を中心とした研究未開発言語の臨地研究の推進
- ・記述研究を支える方法論開発と共同研究インフラの整備
- ・言語運用の実際を基盤とした理論研究枠組みの再構築
- ・言語の構造的多様性の幅と深さ、およびその多様性に見られる規則性の研究
- ・言語構造の形成・変化に見られる規則性の探求とそれを形成する動機付けの多面的研究

【人類学におけるマイクロマクロ系の連携】

代表者: 深澤 秀夫

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、トランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティブへの関心が高まってきた。

また他方では、その対極にむかう方向性として、個々人の身体性を考察の起点とした間身体的実践、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフォーダンス、社会空間など、マイクロ・パースペクティブを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。

こうした国内外の研究動向をまえに、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究をこえた次元での、新たな概念化と理論化の試みである。本基幹研究は、その点で先導的な役割をになうことを目標とする。具体的には、個人と社会、構造とエージェンシーといった二項対立の構図をこえた地点から、身体や実践の主題をめぐるマイクロ領域での研究と、広域におよぶ空間移動や生物進化のダイナミクスまで射程に入れたマクロな時間軸に基づく研



究との、接合ないし理論構築にかかわる研究成果の呈示を企図するものである。

【中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成】

代表者: 黒木 英充

本基幹研究は、中東から東南アジアまでを含めたイスラーム圏において観察される人間移動と、諸宗教宗派・民族の織りなす社会関係とを連関させて、「多であること」の問題性を追究する。多元的社会的生成過程とイスラーム的ネットワーク拡張の動態、移民・難民の政治社会空間に対する影響、個人・集団のアイデンティティ戦略と政治思想の連関、などの問題に取り組む。

本基幹研究は、2005(平成17)～2009(平成21)年度「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の発展形である。ペイルート・コタキナバル両海外拠点を管轄するフィールドサイエンス研究企画センターや、MEIS「中東イスラーム研究拠点」と連携しながら、ペイルート拠点において共同利用・共同研究課題を国際的規模で推進する。また中東イスラーム研究/教育セミナー、ペイルート若手研究者報告会や歴史文書セミナーなどを通じて次世代研究者の育成にも当たる。さらに歴史的画像資料などの修復やデジタル化、それを使った研究成果の社会還元を積極的に行う予定である。

【アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求】

代表者: 永原 陽子

本基幹研究の主たる目的は、グローバル化のなかで大きな変容を迫られているアフリカ諸地域の文化を研究する本研究所の人類学・地域研究(歴史学)研究者が、各自の研究活動に立脚しつつ、共同で多元的世界像の探求・構築を進めることである。

アフリカ文化研究の具体的トピックとしては、たとえば、植民地経験と社会変化、遊牧民/牧畜民と農耕民、人の移動と集団間関係、社会の中の女性/シングル、などがあげられる。メンバーが個々にこういったトピックで研究をすすめてつ、研究班全体として、公開共同研究会の開催・アフリカ若手研究者セミナーの実施・海外研究者との連携・競争的資金への応募・研究成果の発信などの活動を行う。

以上のようなアフリカ文化の基礎研究は、紛争・難民、政治的民主化、社会的差別等、現代アフリカの抱える諸問題の根本的な解決に不可欠であるばかりでなく、それらの問題の根本にある近現代世界の構造そのものを問い直し多元的な世界像を構築するのに寄与するものと期待される。

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)

共同利用・共同研究拠点である本研究所にとって、所員が所外の研究者と共同で推進する共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)は、もっとも大切な研究事業のひとつです。プロジェクトに参加する所外の研究者は、AA研の「共同研究員」の身分を委嘱されます。

各プロジェクトは毎年、所外の研究者を含む「共同研究専門委員会」によって、その研究成果や広報、そして学術的意義において評価されます。

これまで数多くのプロジェクトが組織され、約650点におよぶ出版物や、オンライン辞書・データベースなど、多様な研究成果をあげています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

2010(平成22)年度に進行中の研究課題

以下のリストでは、大きく分野ごとに分けていますが、多くの研究プロジェクトが複数の分野にまたがるテーマを扱っています。

■言語学系**【多言語状況の比較研究】**

2008～2010年度

代表者:砂野 幸稔(熊本県立大学) 所員2/共同研究員32

従来、多言語状況の管理を目的とする言語政策をめぐる議論は、基本的に一国レベルで取り上げられてきたが、一方ではグローバル化による英語の影響力の拡大があり、他方ではEUの少数言語憲章や、世界銀行、ユネスコ等による「万人のための教育」キャンペーンの母語主義教育など、各国民国家のレベルを超えた介入が、各国家の言語状況に影響を及ぼすようになってきている。

一国一言語という19世紀ヨーロッパ型国民国家の理念型がもはや通用しないことは明らかだが、それに代わる多言語主義にもとづく社会の形成については、さまざまな試みはすでに存在するが、いまだ試行錯誤の段階を超えていない。

本研究では、ヨーロッパとアジア、アフリカの相互に大きく異なった歴史的社会的諸条件のもとにあるさまざまな国家、社会の言語問題とそこで行われている言語政策について、相互比較を通じて、従来の一国レベルの理解とは異なった総合的な展望を得ることを目指したい。

**【チベット=ビルマ系言語から見た文法現象の再構築 2】**

2009～2010年度

代表者:澤田 英夫 所員3/共同研究員12

格の体系とその周辺現象を扱った「チベット=ビルマ系言語から見た文法現象の再構築1」に続く本プロジェクトでは、「文の特徴付けと下位分類」をテーマとする。前プロジェクト同様、メンバーが各自の研究によって得たチベット=ビルマ系諸言語の文の構造と機能に関する言語事実、および、それらを観察し記述する視野の広がりや深さを共有し、それによって各メンバーが文を観察する視野を拡大・深化させ、その視野から見た文に関する具体的な記述を推し進め、ひいてはチベット=ビルマ系言語の文に関する知見をより豊かなものを目指す。

【宣教に伴う言語学(第2期)】

2009～2011年度

代表者:豊島正之 所員2/共同研究員7

大航海時代のキリスト教宣教に伴って16～17世紀に作成された布教対象語の研究書(辞書・文法書)及び宗教書(教義書・修徳書等)は、ラテン文法が通用する言語とは全く系統の異なるアジア・アフリカ・南米の諸言語との最初の言語学的邂逅の記録として、「宣教に伴う言語学」という言語学史の新領域の研究対象を形成している。「宣教に伴う言語学」は、21世紀に入ってからからの研究の進展がめざましい若い研究分野である。

大航海時代の「宣教に伴う言語学」に関連する資料・史料は、歴史的経緯から世界各地に散在しており、研究者も、南米、アフリカ、インド、フィリピン、中国、日本と分散している。又、「宣教に伴う言語学」研究には、当時のラテン・スペイン・ポルトガル語以外に、各布教対象語の十分な知識が必要であり、これらの条件から、必然的に、国際的な共同研究が要請される。

本プロジェクトの目的の1つは、大航海時代の「宣教に伴う言語学」の国際的な共同研究のために必要なリソース、関連する文献学・言語学の研究リソースを作成・維持し、国際的共同研究に資する点にある。

【朝鮮語歴史言語学のための共有研究資源構築】

2009～2011年度

代表者:伊藤智ゆき 所員1/共同研究員16

古代～現代という長期に亘る朝鮮語の歴史言語学的研究においては、表記法上の制限(15世紀にハングルが創製されるまでは朝鮮語は基本的に漢字のみで書き表されていた)や、文献間もしくは一文内における言語学的現象の揺れや非一貫性、といった問題点を克服するため、専門的かつ厳密な書

誌学的検討、膨大な資料のデータ処理、歴史的発展を辿るための現代朝鮮語諸方言研究等、一個人の研究ではカバーしきれない、多様な研究知識と経験、分析技術、研究資源の蓄積が必要とされる。本研究プロジェクトでは、朝鮮語史研究を専門とする多くの研究者が共同でこれら問題点の多角的検討に当たり、研究資源共有のための技術開発、構築手法の研究を進めながら、主としてwwwサイトを通じ研究資源・成果を公開していくことで、朝鮮語史研究の更なる発展と、広く朝鮮語研究・言語学研究一般への国際的貢献を目指す。

【節連結に関する通言語的研究】

2010～2012年度

代表者:渡辺 己 所員6/共同研究員16

通言語的な比較対照研究は、単一の節(あるいは単一の節からなる単文)をもとに行われることが多い。しかし、およそ自然言語であれば、実際の運用にあたっては複数の節が連続して現われる。その際の節のつながり方はさまざまで、大きくは等位的か従属的な連結が考えられる。本研究では、形態統語的に多様な言語を専門とする国内外の研究者を集めることにより、類型的に異なるタイプの言語がそれぞれにおいてどのように節を連結していくのか考察し、そこに節連結に関する類型の特徴、あるいは通言語的共通点を探るものである。

さらに特に近年になり、形態統語的には従属節だと考えられるものが、自然談話のなかで主節なしで単独で現われる現象(「言いさし」、「insubordination」)が通言語的に研究されるようになった。本研究ではこのような現象を含め、言語の実際の運用における節連結を視野におきながら研究を進める。

なお、本研究は、特別経費「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy)」の活動の一環とする。

【北方諸言語の類型論的比較研究】

2010～2012年度

代表者:呉人 徳司 所員5/共同研究員21

本研究では、北東シベリアから北米にかけて分布する諸言語(以下、北方諸言語)の様々な文法現象に関する類型論的比較研究を行う。人類の移動のルートにあたるこの地域は、類型・系統を異にする言語の蝟集が世界的に見ても突出した地域として注目されている。これらの言語が示す類型的多様性は、語形成手段、文法関係の標示、語順、文法範疇など、形態論から統語論へと多岐にわたる。

従来、北東アジアと北米では別個に研究が進められてきたが、これらの文法現象の中には大陸の新旧を越えた類似性を示すものもあり、両地域を総合的に捉える視点が重要である。

本研究では、以下のような研究を行なっていく。

1. 国内外の北方諸言語研究者の協力体制により、海外研究者にも協力を呼びかけ国際的な北方諸言語の類型論的研究を構築することを目指す。

2. 「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy)」とも連携し、北方諸言語の記述の前提である言語データの加工と公開に取り組む。

【インドネシア諸語の記述的研究: その多様性と類似点】

2010～2012年度

代表者:塩原 朝子 所員2/共同研究員14

本研究は、「インドネシアの言語」の研究の進展を目的とし、以下の2つの活動を行う。

1. 研究者が個別言語の文法記述によって得た知見を集め、インドネシア諸語に関して個別言語間の相違点/類似点を明らかにする。メインテーマは「インドネシアの言語の態」とし、各言語の記述データを元に個別言語の記述手法ならびに、類型論的、比較言語学的事柄について議論する。

インドネシアの言語において文法の根幹を成す「態」に注目することによって、付随的に「情報構造の標示」「時制・相・法」なども含め、インドネシア諸語の実相が広い範囲で明らかになることが期待される。

2. 「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy)」内のDALD (Documentation and Archiving of Language Data)プロジェクトと連携し、1の言語記述の前提である言語データの加工と公開に関わる作業を行う。

なお、対象言語は、インドネシア国内で話されているオーストロネシア語を中心とするが、系統的特徴を共有するオーストロネシア諸語、地域的特徴を共有するパプア諸語も射程に入れる。

【漢字字体規範史研究 第二期】

2010～2012年度

代表者:石塚 晴通(北海道大学名誉教授) 所員1/共同研究員13

漢字字体には規範がある。本プロジェクトは、その規範の歴史的転換をもたらす強い影響力を持つ文献、及びその規範を忠実に反映した文献からなる「漢字字体規範史料」を選定し、漢字字体規範の史的展望を行なう。過年度までの「漢字字体規範史研究」(2007～2009)プロジェクトで構築した「漢字字体規範データベース」HNG(<http://joao-roiz.jp/HNG/>)を研究基盤に置き、漢字字体史の科学的な編年標準を確立する事を目指し、その過程で史的・国際的検討に耐える漢字字体概念の一般化と文書化を行なう。又、HNG データベースの拡張にも努める。(HNGデータベースは、「東洋文字文化の継承

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)

と発展に寄与する優れた業績」であるとして第一回「立命館白川静記念東洋文字文化賞」を受賞している。

メンバーには、文献学だけでなく、工学(光学的手法による非破壊文書年代検査法)専門家を含み、唐代写本・奈良朝写経を多数所蔵する正倉院事務所所長、京都博物館保存課課長、海外からは大英図書館・パリ国立図書館の各敦煌コレクション責任者に加え、編年規準の客観化・国際化に十分留意したプロジェクトとする。

【契丹語・契丹文字研究の新展開】

2010～2012年度

代表者:松川 節(大谷大学) 所員1/共同研究員8

10世紀、現中国北部～モンゴリア地域に成立した契丹(遼)では、漢語とともにモンゴル語系の「契丹語」が主要言語として通用し、「大字」と「小字」という異なるタイプの文字体系で記されていた。これらは石刻史料の形態で現存するが、資料数は僅少であり、内容的にも墓誌に限られるため、結果的に未だ契丹語および文字の解明には到っていない。

また従来の研究においては、契丹文字資料の研究は歴史学的見地からの研究が主流を占め、言語学的見地からの研究は十分に尽くされているとは言い難い。本プロジェクトは、契丹文字資料について、最新の言語学的研究をもとに研究・分析を行い、新たな契丹語・文字研究を目指す。

【ダイクシス表現の多様性に関する研究】

2010～2011年度

代表者:林 徹(東京大学) 所員1/共同研究員5

指示詞、代名詞、人称や時制の標識などの空間ダイクシス、人称ダイクシス、時間ダイクシスに関する表現は、言語の基本的要素であるにもかかわらず、意味を明確に説明することが極めて困難である。その理由は、言語が発せられる状況が意味と緊密に結びついているからである。本研究は、性急に一般化を求めることなく、手話を含めたアジアの諸言語に見られるダイクシス表現のさまざまな用法を、定型表現など非ダイクシス的用法も含めて、できるかぎり詳細に検討し、アジアの諸言語におけるダイクシス表現の信頼できる概説を作成する。また、これと並行して、従来母語話者の内省報告に偏っていた嫌いのある言語データを多様化するために、新たな調査法を考案し試行する。

■人類学系

【アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に關する人類学的研究】

2008～2010年度

代表者:三尾 裕子 所員3/共同研究員7

近年のヒト、モノ、情報の移動や越境現象は、「グローバル化」と名付けられ、政治学・経済学などの社会科学等での研究が興隆している。しかしながら、従来の研究の多くは、「グローバル化」に関し、いわば世界システム論が言う「中心/周辺」ないしは「南北問題」的な二項対立図式を前提としたものが主流であった。そこで、本プロジェクトでは、総論的、観念的に語られることの多かった「グローバル化」について、文化人類学者を中心に歴史学や地域研究の研究者も加えて、アジアとアフリカにおける「グローバル化」をめぐる多様で複雑な諸相について具体的、実証的に解明していくことを目指すものである。また、「グローバル化」を最近の特異な現象として捉えるのではなく、より長い歴史の中で相対化して捉えることも目指す。

更に、同時にこの研究を通じて従来の地域概念の再検討へ寄与することも目的とする。

【人類社会の進化史的基盤研究(2)】

2009～2011年度

代表者:河合 香史 所員5/共同研究員18

人類は生物分類学的には霊長目に属し、進化史的にはごく最近(約600～700万年前)までチンパンジーやピグミーチンパンジー(ボノボ)といった大型類人猿とともに進化の過程を歩んできた。人類の社会性(sociality)の基盤はこれらヒト以外の霊長類との連続性と非連続性を検討することによってこそ、より深く明解な人類学的理解が可能となろう。このプロジェクトは、長期的プロジェクトの第1弾として2005～2008年度に行われた「人類社会の進化史的基盤研究(1)」におけるテーマ「集団」に続く第2弾として「制度」をとりあげるものである。ここでは、「制度は言語のうえに成立する」という一般に当然と思われる命題にたいして、音声言語をもたないヒト以外の霊長類に「社会」を認め、社会構造論や家族起原論などを展開してきた霊長類学の知見や理論によってこれを相対化する。そのいっぽうで、当該社会の成員の行為・行動のなかに制度の前駆的なありようをみとめ、言語を前提としない制度の可能性とその進化史的基盤を追求する。

【「シングル」と家族 ―縁(えにし)の人類学的研究】

2010～2012年度

代表者:椎野 若菜 所員2/共同研究員21

本研究は「シングル」とされる人間の存在とその生き方について、それと相反し強化しあうかのような存在である、当該社会における家族親族、またくわえて個々人に少なからず影響を及ぼす国家の存在との関係性を念頭に、縁(えにし)という言葉を手がかりに社会・文化人類学(以下、人類学と記す)の立場から追究するものである。

現代社会における個人の生き方は多様化してきている。出稼ぎ、単身赴任、留学、宗教的理由、また被災、少子高齢化といった要因で頻繁に人は移動し分散し、こうした社会的環境の変化によってライフスタイルや人と人との関係性も大きく変化している。いったん崩壊したかにみえた近代家族だが、それをモデルにした擬似的な「家族的」なものを求め、近年、人々がつながらだしている事象がみられる。以上のような現代の事象をもとに、本研究はアジア・アフリカを中心に家族、社会の実態と、それらによって創出されたとも考えられる「シングル」の生きる戦術を明らかにする。さらにこうした作業により、固定されがちなシングルに対する現代的な社会理念、シングルの存在の対として位置づけられがちな理想像として生産される家族(像)について、人類学の立場から検討する。

【東・東南アジアにおける地域間越境移住の人類学 ―結婚(離婚)移住ネットワークにみる文化・エスニシティとアイデンティティ―】

2010～2012年度

代表者:石井 香世子(名古屋工業大学) 所員2/共同研究員13

本研究では、専門分野を越えた内外の若手新進気鋭の研究者を集め、東・東南アジア地域に近年発達しつつある、越境結婚(離婚)移住ネットワークについて分析する。これまで人類学の分野では、東・東南アジア地域を対象とした移動研究・越境移動研究が数多く蓄積されてきた。しかし一方で、今日の越境移動の重要な一角を占める結婚移住に焦点を当て、移動ネットワークやメカニズム、越境移動に伴う諸現象を分析した研究は未だ少ない。ましてや、国際離婚にともなう離婚移住に着目した研究は皆無に近い。本研究ではこれらの越境移動事例に焦点を当てて研究することで、人類学の移動・移民研究分野において新たな知見を得ることが期待される。

【社会開発分野におけるフィールドワークの技術的融合を目指して】

2010～2012年度

代表者:増田 研(長崎大学) 所員1/共同研究員14

本研究は、文化人類学に隣接した今日的な実践的分野である社会開発における研究活動に必要とされるフィールドワークの技術的融合を目的とする。具体的には、(1)参与観察とインタビュー調査を中心とする文化人類学の方法論を、広い意味での社会調査のなかに適切に位置づける、(2)疫学・統計といった数量的調査および空間情報システム(GIS)によるアウトカムを、質的調査の成果と組み合わせる方法を模索する、(3)アジア・アフリカにおける人口静態・動態調査のアウトカムに対しての検討を通して技術的融合の可能性を探る、および(4)これらの技術を参加型開発の実践に応用する手法を見出す、以上4点を活動内容とする。

社会開発分野においては人類学と同様に「フィールドワーク」を必要とするとはいえ、Rapid Ethnographic Method (Rapid Appraisal)のような、時間をかけずに手っ取り早く調査を済ませる方法論が提唱されている。しかし我々は、このような「目的に向かって単線的に進む調査手法」からそぎ落とされてしまう「ノイズ」にも注目し、従来型の地域の文脈に根ざした人類学的な手法、「問題をめぐって発見をあぶり出していく螺旋的思考運動」を、多様な分野における調査・分析方法と具体的データを事例に吟味し議論しつつ、新たなフィールドワークの方法論へと結びつけたいと考えている。

■歴史学・地域研究系

【東アジアの社会変容と国際環境】

2006～2010年度

代表者:中見 立夫 所員3/共同研究員37

近年における国際情勢の変化と学術交流の発展によって、われわれ歴史学研究者は東アジア各地域の文書館・図書館などに所蔵される一次資料に対し、以前とは比べられないほど容易に接近できるようになった。さらに現地学界でも、新たな歴史評価・研究動向がおこり、われわれの研究への刺激となっている。ただ対象とすべき資料の量があまりに膨大で、その実態を体系的に把握してはいない。また、個別の研究が深化するとともに、より大きな視野のもとに、問題をとらえなおし、分析枠組みを再検討することも必要である。さらに海外学界との共同研究、史料調査も、双方にとって、より具体的で実りの多い形で推進しなければならない。

本プロジェクトでは、このような研究状況を念頭におきながら、

共同利用・共同研究課題(共同研究プロジェクト)

18世紀から20世紀初頭の東アジア世界各地における社会の変容が、外部世界とどのように有機的に連関していたかという問題を中心とする、文書史料によりそれがどこまであきらかにできるか検討する。東アジアに関する史料と研究情報の開かれたフォーラムをめざしている。

【タイ文化圏における山地民の歴史的研究】

2006～2010年度

代表者:クリスチャン・ダニエルズ 所員2/共同研究員17

中国西南部から大陸東南アジア北部に跨がるタイ文化圏の歴史においては、タイ系民族の盆地政権がその周辺の山岳地帯に居住する山地民を緩やかに「統治」した。19世紀以降、タイ文化圏は中国、ミャンマー（ビルマ）、タイ、ラオス、ヴェトナム及びインドの6ヶ国に組み込まれて、盆地政権は消滅した。盆地政権の領民はこの6つの近代領域国家に同化を強要されはしたものの、タイ文化圏はなお存続している。これまで研究者は、盆地政権中心にこの地域全体の歴史を再構築してきたが、山地民が盆地政権の存続を揺るがす存在であるにもかかわらず、山地民の歴史的役割を重要視してこなかった。本プロジェクトの目的は山地民の歴史的役割を明らかにして、その役割を総合的に概念化することによってタイ文化圏の歴史的形を再解釈することである。このような再解釈によって、これまでタイ系民族側から叙述されたタイ文化圏の歴史がもっと公平に見られるようになると期待できる。

夥しい数の民族集団が居住する地方はそれぞれ異なるが、その歴史体験の共通性を明らかにする視点を採用する手法によって、タイ文化圏の歴史に対する統一的理解を深化させることを、本プロジェクトは目指している。

【インドネシア在地文書研究プロジェクト】

2009～2011年度

代表者:宮崎 恒二 所員2/共同研究員6

本プロジェクトは、これまで日本でまったく用いられてこなかったインドネシア諸語による在地文書に焦点を当て、その全体像を把握するとともに個々の写本ないし写本群のコーパスを構築し、それらを用いたインドネシア諸地域の歴史、文化、社会、言語の諸側面の解明を目指す。また、これらの在地固有言語による文書を資料として用い、かつその利用方法を確立することによって、植民地行政文書や口頭伝承に依拠した研究とは異なり、現地語による文字表象を通じた、新たな視点の開拓を目指す。さらに、個別文化の研究にとどまらず、広く文字文化一般、そして口承伝統と文字文化の関係についての考察を進める。3年間のプロジェクト期間を設け、第1段階として、インドネシア諸語による写本の全体像を解明すると共に、ジャワ語・

ジャワ文字による写本を研究対象として取り上げる。

【歴史的観点から見たサハラ以南アフリカの農業と文化】

2010～2012年度

代表者:石川 博樹 所員2/共同研究員15

サハラ以南アフリカ諸国の経済停滞が国際的な懸案となっている現在、大多数の国々の基幹産業である農業についての研究を一層深化させることが国際的に求められている。

これまで我が国におけるサハラ以南アフリカ農業研究は、主に農学、人類学、経済学の研究者によって実施され、多くの成果をあげてきた。本研究課題においては、これらの学問分野の研究者に歴史学研究者も加わり、サハラ以南アフリカ諸地域の農業と文化の関連について歴史的観点からの研究を共同で実施する。特に社会的・文化的に重要な役割を果たしてきたにもかかわらず未解明の課題が少なくない主食用作物に関わる史的諸問題を広範に検討することによって、サハラ以南アフリカ農業研究の新たな研究領域の開拓を試みる。

【中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存】

2010～2012年度

代表者:黒木 英充 所員5/共同研究員10

レバノン、シリア、トルコ、イランの主要都市を対象として、近代における都市空間の拡大を人間移動の結果ととらえ、そこでいかなる多民族・多宗派関係が形成されてきたかを明らかにするとともに、その共存関係が現代の政治・社会運動をどのように方向付けているかを解明する。

各都市に関してムスリム・非ムスリム間の、また多民族間の共存関係を分析することは、広く地球社会全体のムスリム・非ムスリム関係、さらには多民族・多宗派関係一般の望ましいあり方を構想するための有効な知見を提供することになる。歴史学、地理学、人類学、政治学、都市計画学といった多様な領域を専門とする研究者を国際的に組織し、バイルートの「中東研究日本センター」を拠点として調査研究を実施する。研究成果も同海外拠点を利用して国際的に発信する。



ネットワークの構築

海外学術調査総括班



海外学術調査総括班(The Overseas Scientific Research Coordination Team: OSC)は、AA研所員が培ってきた人文社会系フィールドワークの諸経験をふまえて、フィールドサイエンスの構築可能性の探究と超域的研究ネットワークの確立をめざす事業です。

1975(昭和50)年以来、人文社会系・理工系・医学系・農学系・生命科学系など、さまざまな分野で海外学術調査にたずさわる研究者・研究組織間、そして、研究者・研究組織と文部科学省や日本学術振興会との間の情報交換や連絡調整に従事してきました。2005(平成17)年度からは、事務局をAA研フィールドサイエンス研究企画センター内に置き、活動内容のさらなる拡充につとめています。

本事業の主な活動は次の2つです。

1. 海外学術調査の研究組織の代表者を中心に、広く全国の研究者を集めた「海外学術調査総括班フォーラム」の開催
2. フィールドネット研究会など、フィールドサイエンスの構築可能性をさぐる多彩な企画の継続的な開催・運営

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

Fieldnet



Fieldnetは、国内外でフィールドワークを行う研究者が、文系/理系、また専門分野や所属の壁を越えて参加し、個々のフィールドや研究上の情報などを提供し合うことで、個別的な<知>を結び、それによって新たな<知>を構築するためのネットワークです。

具体的には、参加者が各フィールドの情報や研究紹介をアップするためのウェブサイト(<http://fieldnet.aacore.jp/>)をWikiを用いて立ち上げ、研究者間のコミュニケーションが生まれる場を提供しています。また、オンラインで得たつながりを、オフラインのワークショップや研究会、ラウンジ、といった互いの意見を交わす機会へと発展させていきます。このように、オンラインとオフラインを併用することによって、異分野から得られた知的刺激を、個人研究へとフィードバックさせ、さらには新たな学際的研究に活かすことを目指しています。

自分の研究をアピールする場であると同時に、世界中の地域情報を送受信する場であるFieldnetは、異なる<知>をつなげるネットワークです。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>



大型プロジェクト

東南アジアのイスラーム(ISEA)



ISEA(「東南アジアのイスラーム—トランスナショナルな連関と地域固有性の動態」)は、社会的に影響を強めつつある東南アジアのイスラームに関して、ローカルな文脈におけるその固有性を実証的に明らかにすると同時に、中東などに端を発するトランスナショナルなイスラーム復興やイスラーム主義等の諸潮流が当地のローカルな文化や社会に及ぼす影響など、ローカルとトランスナショナルの2つの次元の関係性や動態を解明することを大きな目的としています。またそのローカルとトランスナショナルの動態が政治や経済、紛争や平和構築などといった広義の公共領域へ及ぼしうる影響について、中東研究者を含む複数の分野(歴史学、人類学、政治学、国際関係論、法学、宗教学等)の研究者や実務家等の協働によって具体的に解明することを目指します。本プロジェクトは文部科学省が新規に設立した「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」枠によって2006(平成18)年10月より4年半計画で実施するものです。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>



言語ダイナミクス科学研究プロジェクト(LingDy)「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」

世界に7,000弱あるとされる人間の言語は、人間の認知能力と社会活動が生み出す伝え合いの体系がいかに多様な形を取りうるかを見せてくれます。近年、特に研究未開発の少数言語からのデータが徐々に蓄積されてくるとともに、人間言語に関する一般理論の構築を目指す言語研究の中でも言語の構造的多様性の幅と深さが強く意識されるようになってきました。また、欧米主導の急激な経済グローバル化の中で伝統的言語の大量消滅が世界的に進む今日、言語・文化の多様性の保護・研究を継続的に保障する基盤を構築することが国際的な緊急課題となっています。

本プロジェクトは、こうした学術的、社会的要請に応えるため、文部科学省特別経費を受け2008(平成20)年度より5カ年計画でスタートしました。研究未開発言語のドキュメンテーション研究(語彙、文法、テキスト資料、及び文化・社会的情報の収集を通じた多面的な記録と研究)の活性化・体系化と、構造的多様性と歴史的变化のダイナミクスを踏まえた言語システムに関する総合的研究の構築を、継続的な国際連携体制の下で進めることを目的としています。プロジェクトを支える連携体制は、アジア・アフリカ言語文化研究所を国内とりまとめ機関とし、イギリスのロンドン大学東洋アフリカ学学院とドイツのマックス・プランク進化人類学研究所を海外連携拠点として、組まれています。

このプロジェクトで取り組んでいく活動には以下のようなものが含まれます:

- ・言語多様性に関する先端的研究の推進
- ・国際的共同研究インフラの構築と研究交流活性化
- ・研究資源共同利用体制の構築
- ・記述言語学に携わる若手研究者のネットワーク構築

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>



既形成拠点

アジア書字コーパス拠点(GICAS)



GICAS「アジア書字コーパス拠点」は、文部科学省のCOE拠点形成・特別推進研究(COE)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」(Grammatological Informatics based on the Corpora of Asian Scripts)によって2001(平成13)～2005(平成17)年度の5年度にわたり補助金を得て形成されてきた「COE研究拠点」の1つです。

GICAS拠点が体系化を目指す「文字情報学」は、アジアにおいてとりわけ豊饒な「文字」を情報通信の基盤メディアとして捉え直し、ここに国際的な文字情報通信で求められる学問的基礎を与えることを目的とする新しい学問領域です。

GICASは、研究所の従来の研究活動をいっそう拡充して、統計的解析を行うに十分な規模の資料体(コーパス)としてアジア各地に蓄積される書字文化資料の「アジア書字コーパス」を構築してきました。各地に伝存する碑文・石経、諸宗教聖典の宮廷写本など、本文・字体の双方に規範を示すために作成された聖典書字資料はアジア各地に残存しますが、この電子化を中心とした「アジア書字コーパス」(Corpora of Asian Scripts)は、そこに投影されるアジアでの文字学問研究の伝統と文字使用文化の歴史の電子的な体現であり、「アジア書字コーパス」を現代の情報処理技術で実装することで、検証可能性を持つ新たな学問領域「文字情報学」の創成と体系化の基盤とすることができます。

「アジア書字コーパス」の実装は、文字情報処理に確固たる学問的基盤を与えることを意味し、これによって「アジア書字コーパス」に文字情報学の国際的レファレンス・センターとしての国際的な認知を得て、アジアの文化に根差した文字学研究・文字情報処理においても、我が国が主導的な立場に立つ事を目指すものです。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

中東イスラーム研究拠点(MEIS)



MEIS「中東イスラーム研究拠点」は、本研究所が2005(平成17)年度から2009(平成21)年度まで文部科学省特別教育研究経費(拠点形成)を得て実施した「中東イスラーム研究教育プロジェクト」(The Research and Educational Project for Middle East and Islamic Studies)を通じて形成された中東およびイスラームの研究拠点です。

この拠点の前身となった中東イスラーム研究教育プロジェクトは、2006(平成18)年2月にレバノンのバイルート拠点「中東研究日本センター(JaCMES)」、2008(平成20)年3月にはマレーシアのコタキナバル拠点「コタキナバル・リエゾンオフィス」を開設し、それぞれの運営にあたる一方、中東・イスラームに関する複数の共同研究を展開し、国内外の研究者を招いた不定期の研究会やシンポジウムと合わせて、日本における中東研究、イスラーム研究の全国的な発展や国際的展開に寄与してきました。

また、全国の大学院生や博士課程満期修了者を対象とした中東・イスラーム研究セミナー、同教育セミナーおよびアラビア語、ペルシア語、ジャワ語の文献学・文学セミナー、さらには若手のみならず全国の研究者すべてを対象としたオスマン文書セミナーなどを通して、次世代を担う若手研究者の育成にも努力してきました。

2010(平成22)年4月に発足した本研究拠点は、同時にスタートした基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」や、中東研究日本センター、コタキナバル・リエゾンオフィスの維持・運営にあたるフィールドサイエンス研究企画センターと密接に連携・協力しながら、わが国の中東研究、イスラーム研究のさらなる振興・発展を目指しています。

*なお、本研究拠点の前身である中東イスラーム研究教育プロジェクトの詳細については下記のウェブサイトをご覧ください。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

研究資源

知の拡大を支える 資料と情報のベース



蓄積、加工、公開

アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源

IRC プロジェクト

「アジア・アフリカの言語文化に関する情報資源の蓄積・加工・公開と、それを活用した共同研究手法の開発・国際学术交流の推進」というIRC(情報資源利用研究センター)の設置目的に合致した研究を本研究所内で毎年度募集し、審査を経て「IRCプロジェクト」として採択しています。このほか、本研究所の事業(言語研修など)の成果の電子化、公開などについても協力しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/about/>

オンライン研究資源

AA研の共同研究や、スタッフ個人の研究の成果として、デジタル化された辞書・データベースなどのコンテンツをオンラインで公開しています。これは、AA研が国内外の研究者向けに研究資料や成果を公開することを目的としているものです。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

資料展示(企画展・オンライン展示等)

AA研スタッフが収集したアジア・アフリカの言語と文化に関する貴重な資料や、それらの資料をもとに行われた研究の成果を広く一般に公開するために企画展を実施しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/event/>



出版物



出版物

本研究所では、査読付きの国際的学術誌、共同研究および個人研究を通じたさまざまな研究成果、そして、言語研修や辞典編纂などの事業の成果を、数多く出版して公開しています。研究機関あるいは研究者の方々には多くのものを無償で頒布しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/>

『アジア・アフリカ言語文化研究』 *Journal of Asian and African Studies* (年2回発行)：国内外で高い評価を得ているAA研発行の国際的学術誌です。所外の研究者を含む編集専門委員会(p.6)が編集に携わり、国内および海外から投稿され査読を経た、言語学・歴史学・文化人類学に関する高水準の論文を掲載しています。

『アジア・アフリカの言語と言語学』 *Asian and African Languages and Linguistics* (年1回発行)：アジア・アフリカ諸言語の記述研究の成果を発信するために2006(平成18)

年に創刊された査読付き学術雑誌です。一次データに基盤を置いた研究の成果を共有することで、人間言語の構造的多様性を明らかにし、言語記述・言語理論の両面に貢献することを目的としています。

「アジア・アフリカ言語文化叢書」：AA研を代表する成果シリーズです。所内外の研究者による査読を経て出版しています。「地域・文化研究」：AA研が主催する共同研究プロジェクトの研究報告が中心となっています。

「言語研修テキスト」：AA研で毎年行われる言語研修で用いるために、担当講師が独自に作成したテキストです。

「アジア・アフリカ基礎語彙集」：基礎的な語彙集から辞書まで、多岐にわたるフィールド語彙調査の成果を出版しています。

『フィールドプラス』(年2回発行)：2009(平成21)年に創刊されたAA研の雑誌です。AA研スタッフ・共同研究員をはじめ、人文科学にとどまらない様々な分野で活躍する研究者を執筆陣に迎え、世界のあらゆる場所をフィールド(調査地)とする研究者たちの新しい発想・取り組みやその過程で得られた経験を、さまざまな角度から紹介しています。

成果、共有、発信



海外研究拠点

本研究所は、海外の研究者との連携と交流をより活発におこない、国際的な共同研究を展開していくために、ベイルート(レバノン)とコタキナバル(マレーシア)の2箇所に海外研究拠点を設置しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

中東研究日本センター (JaCMES)



中東研究日本センターは、AA研がレバノンの首都ベイルートに設置した初の海外研究拠点です。2005(平成17)年12月15日にレバノン政府閣議決定による認可を受けて、2006(平成18)年2月1日に開所式を行いました。

本センターは、AA研の共同利用・共同研究拠点としての機能を海外において展開すべく、次のような活動を行います。

1. 若手研究者報告会「日本の中東・イスラーム研究の最前線」
日本の博士課程大学院生や学位取得後の若手研究者が最新の研究報告を行い、レバノンを始めとする中東現地の研究者と直接交流する機会を提供します。
2. 若手研究者の調査派遣
日本の若手研究者を派遣して、現地調査に従事する機会を提供します。
3. 日本・中東関係講演会
日本と中東の関係、日本におけるイスラームの歴史などを専門とする研究者を講演のために派遣し、交流の歴史と現状を紹介する機会を設けます。
4. ベイルート学術情報の紹介
ベイルートを中心にレバノンの活発な学術・文化的活動の情報を収集し、ウェブサイトで公開して紹介しています。

所在地:

Japan Center for Middle Eastern Studies (JaCMES)
2nd Floor, Azarieh Building, A2-1, Bashura, Emir
Bashir Street, Beirut
Central District, LEBANON
Phone/Fax: +961-1-975851

コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)

コタキナバル・リエゾンオフィスは、マレーシア・サバ州政府により設立されたサバ開発研究所(The Institute for Development Studies, Sabah)の全面的な協力により、AA研の東南アジアにおける政治・社会・文化に関する総合的学術研究拠点として、2008(平成20)年3月1日、同研究所内に設置されました。サバ州は、ブルネイ、インドネシア、フィリピンなどの東ASEAN成長地域、南シナ海及びインド洋の交差点にあたり、多様な文化の交流の場となっています。アジア海域世界の動態の解明にとって最適な地の利を生かし、マレーシア、日本および関連諸国の研究者とともに多様な国際的共同研究プログラムを推進します。

所在地:

Kota Kinabaru Liaison Office, ILCAA-TUFS
Institute for Development Studies (IDS), c/o, IDS Lot
2-5, Wisma Setia, Off Jalan Pintas, Pinampang, Kota
Kinabalu, Sabah, MALAYSIA
Phone: +60-88-246116, 246167, 242871
Fax: +60-88-234707

言語音を分析する

音声学実験室

本研究所の音声学実験室は、言語音の基礎研究に関する分析や実験を行うために必要不可欠な設備を備えています。コンピュータスピーチラボ(CSL4500)は、アナログ音声信号を高品質でコンピュータに取り込み、スペクトログラム・フォルマント軌跡・LPC(線形予測符号化)周波数反応・FFT(高速フーリエ変換)パワースペクトル・LTA(長期平均)パワースペクトル・ケプストラム分析・ピッチ曲線分析・エネルギー曲線分析など、さまざまなタイプの分析を行うことができます。波形編集・チャンネル編集・時間編集・振幅編集などの基本的編集機能や、記録・再生機能も有しています。さらに、リアルタイムなスペクトログラム分析・ピッチ分析を行うための専用ソフトウェアも利用可能です。この機器は、言語学的観点から見た発話音の様々な側

面の分析を行うのに適切なものです。

音声学実験室に備えられた音声・言語ライブラリには、所員をはじめとする研究者がフィールド調査を通じて収集した言語音・民話・民族音楽など貴重な録音資料が保管されています。これらフィールド調査の成果である録音ディスク・テープの一部および世界諸言語の録音ディスク・テープは、借り出すことができます。実験室にある分析機器・録音機器・メディア変換用機器などのハードウェアとソフトウェアには使用説明書が備えられ、利用者の便を図っています。

音声学実験室内には、防音スタジオが用意されています。スタジオに備えつけられた高性能のソリッドステートデジタル録音機を使用して、話者の発話サンプルの高品位な録音を行い、実験室の機器を用いてそれを分析することができます。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

文献資料コレクション



文献資料コレクション

本研究所は、1964(昭和39)年の創設以来、アジア・アフリカ諸地域の言語・文化の研究のための重要資料を収集してきました。現在、資料総数は、図書11万冊、雑誌約1,220タイトル、マイクロフィルム1万余リール、マイクロフィッシュ3千余に達し、ほかに古文書、地図、写真、またビデオやCD-ROM等も所蔵しています。

AA研のみがもつ貴重な資料も少なくありません。たとえば、カンボジア語版南伝大蔵経は、戦乱により現地では散逸しましたが、本研究所所蔵本をもとに複製版が作られ、カンボジアの文化教育機関、寺院に寄贈されて、彼の地の文化復興に貢献しました。また、浅井忠倫旧蔵資料(台湾先住民関係の土地契約文書、動画、写真、語彙集、用例集、フィールドノート等)は、研究所ウェブサイトで公開されています。

このほかにも、オスマン語劇場ポスター、ナポレオン「エジプト

誌」(第2版)、19世紀「カイロ石版画集」コレクション、19世紀末からのイランの主要新聞65種、19世紀末に創刊されたベンガル語文芸雑誌のバックナンバー、中国清代の製糖法を伝える画集、清代台湾民俗図、清代モンゴル語仏典、ロシア帝国で出版されたモンゴル語聖書、満洲国駐タイ公使館文書、日本の植民地官僚で京城帝国大学総長も務めた篠田治策の文書など、貴重な資料が所蔵されています。三浦周行旧蔵品を含む朝鮮王朝古文書類コレクションや、清代公文書コレクションは、現在も継続して収集を続けています。

アジア・アフリカ研究における先覚者の個人文庫としては、山本謙吾(満洲語研究)、小林高四郎(モンゴル史研究)、前嶋信次(イスラーム研究)、王育徳(台湾語・文化研究)諸氏の蔵書があります。

なお、故大塚和夫氏の人類学と中東・イスラーム関係の蔵書を大塚文庫として公開すべく、現在準備中です。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/>

書物を集める

研究者養成

知識と経験の 終わりなきリレーのために





知識と経験の終わりになきリレーのために

研究者養成のための事業

本研究所ではアジア・アフリカを中心とする研究活動を新しく展開させ、後世に引き継ぐ次世代研究者を養成するために、3つの側面から機会を提供しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/>

【学ぶ・身につける】

～言語運用能力の習得、研究スキルの習得

特定の言語の短期集中型習得や、地域やトピックを絞り込み深く掘り下げた講義・討論をする機会を提供する企画をしています。

【磨く・鍛える】

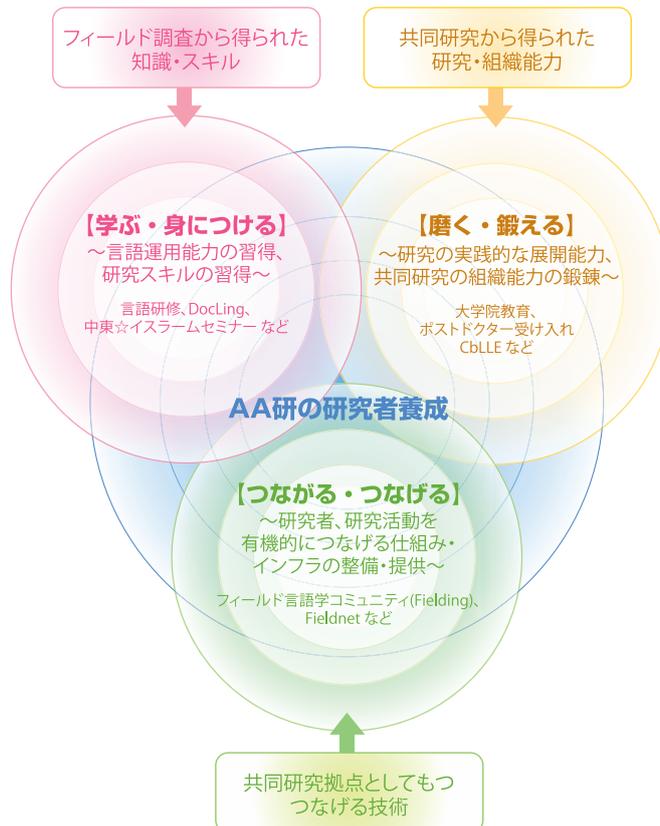
～研究の実践的な展開能力、共同研究の組織能力の鍛錬

大学システムの中にあつて、従来型の大学院教育を超えた個別研究・共同研究の実践的トレーニングを積むための指導、機会を提供しています。

【つながる・つなげる】

～研究者、研究活動を有機的につなげる仕組み・インフラの整備・提供

狭い専門分野や所属学科などの枠を越えて若手研究者をつなぎ、アジア・アフリカに関する共同研究を将来に向けて活性化し、研究の新展開の可能性を広げるための研究者コミュニティ作りの活動をしています。





言語研修

本研究所では毎年夏、専門研究者と母語話者を講師陣に迎え、アジア・アフリカ地域の研究を志す初学者を対象とした短期集中プログラムによる言語研修を実施しています。言語研修に参加することで、現地調査や文献研究を行うために必要な言語知識や調査の手法など、専門的知識も学ぶことができます。研修言語は、おもにアジア・アフリカ地域で話される少数民族の言語を含めた様々な言語を取り上げています。毎年、東京会場で2言語、大阪会場で1言語の研修を実施しています。これまでに実施された言語の数は、のべ114言語、修了者数のべ1101名にのぼっています。修了者の中からは、大学や研究機関の職につき、アジア・アフリカ地域の専門家としての道を歩んでいく方々が輩出しています。実施にあたっては、語学教育に造詣の深いAA研内外の専門委員と担当講師および所員がプロジェクトチームを組み、実施

方法や評価についての議論を行い、効果的な研修を目指しています。すべての研修において講師陣が独自に教材を開発していることも、AA研の言語研修の大きな特徴のひとつです。関西会場の研修のうち大阪で実施されるものは、大阪大学世界言語研究センターの協力を得て行われます。研修生は、大学などの研究機関を通じて全国から公募します。研修を修了した人には審査のうえ、修了証書が授与されます。2006(平成18)年度より東京外国語大学外国語学部および大学院の開講科目となりました。2009(平成21)年度は、アカン語、パンジャービー語(東京会場)、モンゴル語(大阪会場)の講座を開講しました。2010(平成22)年度は、アムド・チベット語、スワヒリ語(東京会場)、スィンディー語(大阪会場)の講座を開講予定です。現在、これまでに作成されてきた教材のウェブ上での公開も進めており、完成したのから順次公開しております。
<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/>

ことばを教える

Documentary Linguistics Workshop (DocLing)



Documentary Linguistics Workshop (DocLing)

Documentary Linguistics Workshop (DocLing) は、消滅の危機に瀕した言語の記録・保存(ドキュメンテーション)に焦点をあてた1週間のワークショップで、2007(平成19)年度からロンドン大学SOASのHans Rausing Endangered Languages Project (<http://www.hrelp.org/>) と連携し、言語ドキュメンテーション分野を代表する研究者(ロンドン大学SOASのPeter Austin氏、David Nathan氏)らを講師に迎え、日本の記述言語学分野の若手研究者に言語ドキュメンテーションの理論を習得させるものです。このワークショップは、文部科学省特別経費による「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構

築(言語ダイナミクス科学研究プロジェクト、略称: LingDy)」(p.19)事業が企画・実施を担っています。

DocLing 2010

講師: Peter Austin, David Nathan, Anthony Jukes (SOAS, University of London)
実施期間: 2010(平成22)年2月2日~5日(金)
場所: アジア・アフリカ言語文化研究所
内容: 危機言語・少数言語の記録・保存(ドキュメンテーション・アーカイビング)に焦点をあてたワークショップです。今回は過去2回のワークショップをふまえた、より発展的な内容を扱いました。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/>

ことばを記録する



中東☆イスラーム関連セミナー

中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めている大学院生や若手研究者を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションの能力を高めることを目的としています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/>

中東☆イスラーム研究セミナー、中東☆イスラーム教育セミナー

本セミナーは、2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進している研修事業です。「研究セミナー」「教育セミナー」とも年1回、4日間ずつ開催されます。

「教育セミナー」は、大学院生を対象に、AA研スタッフと招へい講師による講義、受講生のうち希望者による研究発表から構成されています。中東やイスラームを専門とする大学院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームを専門としない研究者も受け入れ、基礎的な知識や研究手法の情報提供、受講者の間の討論を通じた交流の場を作っています。

「研究セミナー」は、それよりも高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期(博士課程)および博士論文の準備をしている方々を対象にしています。講義は行わず、長時間の研究発表と徹底した討論の機会を提供します。博士論文構想のヒントを得たり、異なる研究分野・地域の研究者との意見交換から知識を拡充したりすることが期待されます。

なお本事業は、2006(平成18)年度から、東京外国語大学大学院、および同大学院と単位互換協定を結んでいる大学院に所属している学生には、単位履修申請科目となっています。

オスマン文書セミナー

オスマン朝の文書・帳簿を古文学・アーカイブ学的視点から学ぶ演習形式のセミナーです。人間文化研究機構(NIHU)プログラム・イスラーム地域研究東洋文庫拠点との共催で、年に1回、2日間にわたって開催しています。

ベイルート若手研究者報告会

中東・イスラーム研究セミナー、教育セミナーと同じく、2005(平成17)年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進してきた事業です。国籍を問わず、日本において中東に関連する人文・社会科学(地域研究・歴史学・人類学・イスラーム学など)を専攻している若手研究者の最新の研究成果を、レバノンをはじめとする中東の研究者たちに広く伝えるとともに、専門家同士の密度の濃い議論の場を提供することを目的としています。

公募によって選考され、中東現地に派遣される若手研究者は、英語による30分間の研究報告を行い、その後15分間、開催地や近隣の中東諸国あるいは欧米から招へいたコメントを含む参加者との間で質疑応答を行います。本報告会は、2006(平成18)年度はイスタンブールのボアジチ大学、2007(平成19)年度はベイルートのクラウン・プラザ・ホテルで開催しましたが、2008(平成20)年度からはレバノン共和国ベイルートにおける研究拠点「中東研究日本センター」を会場とし、「日本における中東研究の最前線 Middle Eastern Studies in Japan: the State of the Art」というタイトルのもとに開催しています。

コーパスに基づく言語学教育研究拠点(CbLLE)

フィールド〜コーパス〜教育



コーパスに基づく言語学教育研究拠点(CbLLE)

「コーパスに基づく言語学教育研究拠点」(Corpus-based Linguistics and Language Education: CbLLE)は、東京外国語大学大学院総合国際学際研究科とAA研との連携による「グローバルCOE」(GCOE)プログラムで、2007(平成19)年度から5年間の予定で実施されています。

ここでいう「コーパス」とは、言語資料に発音・文法・方言・文体など分析に必要な情報(タグ)を加えて構造化したデータの集合体を指し、「コーパスに基づく言語学」とは、自然言語処理を中心とするコーパス言語学より広く、「コーパスデータに基づいた実証的、経験主義的な言語研究」を意味します。

CbLLEでは、「フィールドからコーパス構築へ、さらに教室での応用へ」をスローガンとして、フィールドでの一次資料収集、デジタル化、コーパス構築、コーパスの言語学的な分析から言語教育への応用を一貫したプロセスと捉え、そのための研究、教育、開発環境の充実を目指します。

この目標を達成するために、次の3つの班を設置しています。

・フィールド言語学班: 記述研究が十分進んでいない言語を記述し、コーパスの構造に指針を与えるような研究を行います。

・コーパス言語学班: 言語資料のデジタル化が未発達な言語を対象に、コーパスの構築と、機械可読辞書(MRD)など言語資料を扱うのに不可欠なツールの開発に資する研究を行います。

・言語情報学班: 資料のデジタル化が十分進んだ言語を対象に、分析ツールの開発、機能別コーパスの構築、コーパスを利用した言語教育法や教材の開発などの応用研究を行います。研究の成果をもとに、3つの分野の手法をバランス良く習得した人材の育成を行うことも、CbLLEの主要な目的の1つです。そのために、次のような教育プログラムを実施しています。

・主に博士後期課程の大学院生を対象に研究プロジェクトを公募し、調査やコーパス構築・利用の経験を積ませます。

・3つの分野の第一線の研究者と大学院生が共同で講演・研究発表を行います。

・国内外の学会における若手研究者の研究発表を支援します。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/>

Fieldling フィールド言語学コミュニティ



Fieldling フィールド言語学コミュニティ

Fieldling は、記述言語学に携わる若手フィールドワーカーが主体となって所属研究室の枠を越えた協力体制を構築するための共同研究プロジェクトです。2005(平成17)年にAA研を基地として活動を開始して以降、メンバー自身の企画・提案により、さまざまな研究会やワークショップを行なっています。

2008(平成20)年度からは、言語ダイナミクス科学研究プロジェクトの枠内に運営基盤を置き、これまで以上に活発な活動を展開しています。

主な活動には、

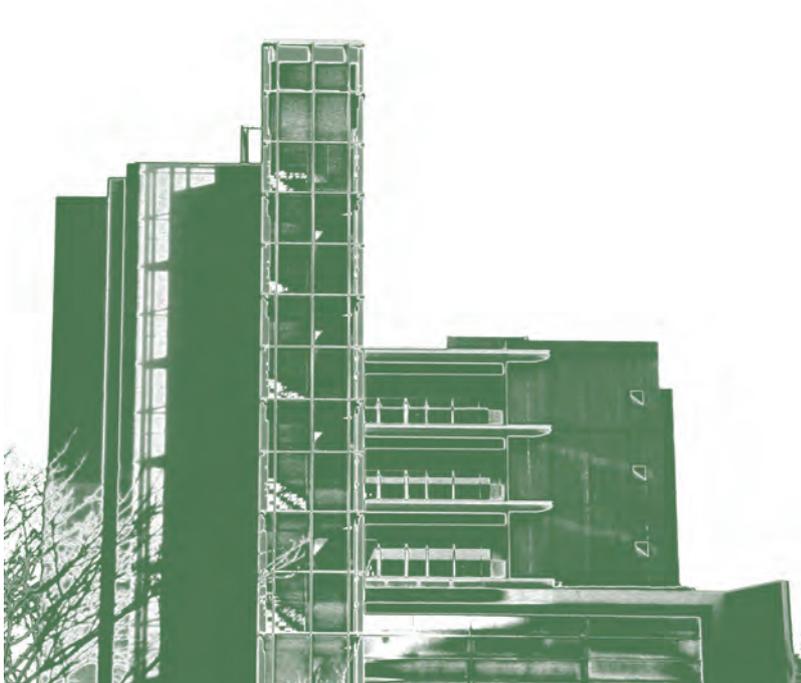
1. 各メンバーが研究対象の言語データを持ち寄り、具体的なトピックに絞って議論する研究会

2. 分析のスキルアップを目的としたワークショップ
3. 現地調査で得た資料や研究成果の刊行
4. フィールドワーカー同士が情報・知識を交換できる記述言語研究コミュニティ・ウェブサイトの構築と運営
5. 言語の記述的研究について広く理解してもらうための一般向けウェブサイトの運営、などがあります。

■『文法を描くーフィールドワークに基づく諸言語の文法スケッチー』: 実際に収集したデータをもとに、各メンバーが専門としている言語の姿を、言語の概略、音声・音韻、形態論、文の構造、テキスト資料という項目に分けて、1言語につき30ページ程度でまとめました。現在第2集まで刊行しています。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/>

持ち寄り、分け合い、育つ



■ロゴマークについて…ラテンアルファベットのAを二つ並べたように見えますが、実はこれはブラーフミー文字の第1字とフェニキア文字の第1字を組み合わせたものです。

2004年度より、「東京外国語大学」は、「国立大学法人」として新しく生まれ変わりました。これにともない、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所では、「アジア・アフリカ言語文化研究所」の名称ならびに本研究の略称である「AA研」と左記のロゴマークの商標登録査定を特許庁に申請し、平成17年8月19日付で商標登録証が発行され、商標として登録されました。

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町3-11-1

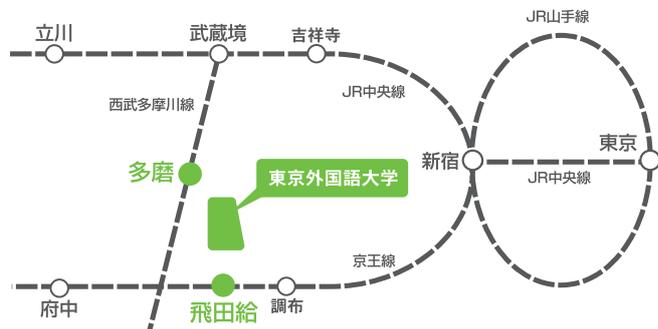
TEL 042-330-5600 FAX 042-330-5610

MAIL ilcaa@aa.tufs.ac.jp

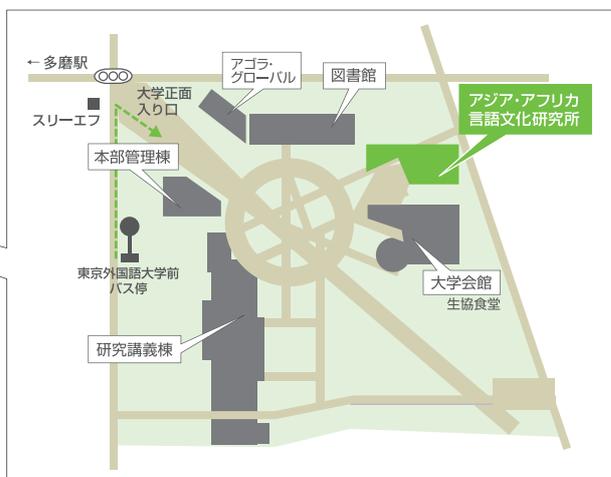
URL http://www.aa.tufs.ac.jp/

Research Institute for Languages
and Cultures of Asia and Africa,
Tokyo University of Foreign Studies,
3-11-1 Asahi-cho, Fuchu-shi, Tokyo, 183-8534, JAPAN
phone +81-(0)42-330-5600, fax +81-(0)42-330-5610

AA研へのアクセス



- JR中央線「東京」駅～「武蔵境」駅、約40分
JR中央線「新宿」駅～「武蔵境」駅、約20分
- JR中央線「武蔵境」駅より西武多摩川線に乗り換え、「多磨」駅下車、駅より徒歩約5分。
- 京王線「羽田給」駅北口または「調布」駅北口より「多磨」駅行きバス乗車、「東京外国語大学前」停留所下車、停留所より徒歩2分。
「羽田給」駅北口から約13分間隔でバスが運行。所要時間約7分。
「調布」駅北口からは20～30分間隔で運行。所要時間約20分。
バス時刻表は <http://www.bus-navi.com/>



■遺跡で花を摘む少女

中東の春はいっきにやって来る。カーッと乾燥した夏が過ぎ、雨がちの冬が終わると、息を吹き返すように大地から緑が湧き返ってくる。おだやかな陽気に誘われて、ピクニックを楽しむ家族も多い。東地中海一帯にひろがるローマ時代の遺跡は、そんなお出かけ先スポットのひとつだ。一年で一番美しい季節を、花と緑に囲まれて子どもたちも満喫していることだろう。

撮影場所：ヨルダン・ハーシム王国ウムカイス

撮影者：錦田愛子

撮影日：2007年2月

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

要覧付録 関連資料

2010（平成 22）年度 5 月 1 日現在

2010(平成 22)年度 共同研究員	・・・2
2010(平成 22)年度 フェロー, ジュニア・フェロー	・・・4
AA 研と外国研究機関との学術協定	・・・5
研究未開発言語文化の調査事業による派遣者	・・・6
言語研修を実施した言語	・・・7
2010(平成 22)年度 科学研究費補助金による研究	・・・8
2010(平成 22)年度 受託研究・受託事業プロジェクト	・・・9
2010(平成 22)年度 日本学術振興会特別研究員	・・・9
AA 研所員を主任指導教員とする博士学位取得者	・・・10
予算・決算	・・・11
沿革	・・・12
歴代所長	・・・12

[2010(平成 22)年度 共同研究員]

(「*」を付した人名は、海外居住者。)

■多言語状況の比較研究

内海 敦子
大原 始子
梶 茂樹
神谷 俊郎
亀井 伸孝
木村 護郎 クリストフ
古閑 恭子
小森 淳子
佐野 直子
塩田 勝彦
品川 大輔
渋谷 謙次郎
砂野 幸稔
竹村 景子
塚原 信行
柘植 洋一
寺尾 智史
名和 克郎
原 聖
原 真由子
藤井 久美子
藤井 毅
Huhbator
前田 達朗
宮崎 久美子
森山 幹弘
安田 敏朗
山下 仁
米田 信子
李 守
若狭 基道
渡邊 日日

■チベット=ビルマ系言語から見た文法現象の再構築2:文の特徴付けと下位分類

池田 巧
海老原 志穂
大塚 行誠
岡野 賢二
加藤 昌彦
桐生 和幸
白井 聡子
鈴木 博之
高橋 慶治
西田 文信
林 範彦

本田 伊早夫

■宣教に伴う言語学(第2期)

岡 美穂子
折井 善果
川口 敦子
岸本 恵実
白井 純
丸山 徹
ASSUNÇÃO, Carlos

■朝鮮語歴史言語学のための共有研究資源構築

李 安九
李 文淑
伊藤 英人
門脇 誠一
岸田 文隆
陳 南澤
須賀井 義教
竹越 孝
趙 義成
辻 星児
中島 仁
南 潤珍
朴 真完
福井 玲
藤本 幸夫
村田 寛

■節連結に関する通言語的研究

風間 伸次郎
加藤 重広
河内 一博
下地 理則
沈 力
塚本 秀樹
長崎 郁
中山 久美子
永山 ゆかり
米田 信子
BERGE, Anna *
COMRIE, Bernard *
DWYER, Arianne M. *
EVANS, Nicholas *
HASPELMATH, Martin *

MITHUN, Marianne *

■北方諸言語の類型論的比較研究

梅谷 博之
江畑 冬生
遠藤 史
小野 智香子
風間 伸次郎
金子 亨
栗林 裕
呉人 恵
児倉 徳和
佐々木 冠
白石 英才
津曲 敏郎
長崎 郁
中山 久美子
永山 ゆかり
BUGAEVA, Anna
堀 博文
山田 祥子
BERGE, Anna *
DWYER, Arianne M. *
MALCHUKOV, Andrej *

■インドネシア諸語の記述的研究:その多様性と類似点

稲垣 和也
内海 敦子
菊澤 律子
北野 浩章
Sri Budi Lestari
長屋 尚典
西山 國雄
野瀬 昌彦
降幡 正志
三宅 良美
山口 真佐夫
EADES, Domenyk *
JUKES, Anthony *
SORIENTE, Antonia *

■漢字字体規範史研究 第二期

赤尾 栄慶
池田 証壽
石塚 晴通

江南 和幸
大槻 信
岡崎 裕剛
斎木 正直
白井 純
杉本 一樹
高田 智和
山田 健三
MONNET, Nathalie *
WOOD, Frances *

■契丹語・契丹文字研究の新展開

更科 慎一
承 志
白石 典之
武内 康則
古松 崇志
松川 節
毛利 英介
山越 康裕

■ダイクシス表現の多様性に関する研究

市田 泰弘
木村 英樹
田窪 行則
西村 義樹
林 徹

■アジア・アフリカ地域におけるグローバル化の多元性に関する人類学的研究

新井 和広
岩谷 彩子
奥島 美夏
木村 自
湖中 真哉
小松 かおり
富沢 寿勇

■人類社会の進化史的基盤研究(2)

足立 薫
伊藤 詞子
内堀 基光
梅崎 昌裕
大村 敬一

春日 直樹
 亀井 伸孝
 北村 光二
 黒田 末寿
 蔣 宏偉
 杉山 祐子
 曾我 亨
 田中 雅一
 寺嶋 秀明
 西江 仁徳
 早木 仁成
 船曳 建夫
 山越 言

■「シングル」と家族一
 縁(えにし)の人類学的
 研究

上杉 妙子
 植村 清加
 宇田川 妙子
 岡田 浩樹
 國弘 暁子
 小池 郁子
 小林 未央子
 小馬 徹
 新ヶ江 章友
 高橋 絵里香
 田所 聖志
 田中 雅一
 棚橋 訓
 谷口 陽子
 辻上 奈美江
 花淵 馨也
 馬場 淳
 妙木 忍
 村上 薫
 八木 祐子
 横田 祥子

■東・東南アジアにお
 ける地域間越境移住の
 人類学—結婚(離婚)
 移住ネットワークにみる
 文化・エスニシティとア
 イデンティティー
 石井 香世子

岩井 美佐紀
 奥島 美夏
 嘉本 伊都子
 工藤 正子
 Saihanjuna
 酒井 千絵
 陳 天璽
 渡邊 暁子
 DEALWIS, Caesar *
 夏 暁鷗 *
 金 美榮 *
 松尾 寿子 *

■社会開発分野におけ
 るフィールドワークの技
 術的融合を目指して

石森 大知
 小國 和子
 亀井 伸孝
 佐藤 廉也
 白石 壮一郎
 白川 千尋
 杉田 映理
 孫 暁剛
 野村 亜由美
 波佐間 逸博
 古澤 拓郎
 増田 研
 宮地 歌織
 宮本 真二

■東アジアの社会変容
 と国際環境

赤嶺 守
 石井 明
 石川 禎浩
 井上 治
 井村 哲郎
 上田 貴子
 WOLFF, David
 江夏 由樹
 岡 洋樹
 岡本 隆司
 笠原 十九司
 加藤 直人
 川島 真

貴志 俊彦
 岸本 美緒
 楠木 賢道
 Saveliev, Igor
 佐々木 揚
 新免 康
 菅原 純
 寺山 恭輔
 西村 成雄
 萩原 守
 濱下 武志
 原 暉之
 平野 聡
 広川 佐保
 BORJIGIN, Burensain
 細谷 良夫
 松川 節
 松重 充浩
 毛里 和子
 森川 哲雄
 柳澤 明
 吉澤 誠一郎
 吉田 豊子
 Di COSMO, Nicola *

■タイ文化圏における
 山地民の歴史的研究

飯島 明子
 池田 一人
 樫永 真佐夫
 片岡 樹
 加藤 高志
 清水 享
 新江 利彦
 新谷 忠彦
 園江 満
 武内 房司
 立石 謙次
 富田 晋介
 長谷 千代子
 西谷 大
 村上 忠良
 山田 敦士
 吉野 晃

■インドネシア在人文
 書研究プロジェクト

青山 亨
 風間 純子
 菅原 由美
 Sri Budi Lestari
 染谷 臣道
 深見 純生

■歴史的観点から見た
 サハラ以南アフリカの農
 業と文化

網中 昭世
 安溪 貴子
 石山 俊
 工藤 晶人
 小松 かおり
 佐藤 千鶴子
 佐藤 靖明
 鈴木 英明
 高根 務
 鶴田 格
 藤岡 悠一郎
 藤本 武
 真城 百華
 溝辺 泰雄
 村尾 るみこ

■中東都市社会におけ
 る人間移動と多民族・
 多宗教の共存

上野 雅由樹
 白杵 陽
 小副川 琢
 松原 康介
 山本 薫
 吉村 貴之
 HANAFANI, Sari *
 HOURCADE, Bernard *
 KANAFANI-ZAHAR,
 Aida *
 KNOST, Stefan *

[2010(平成22)年度 フェロー, ジュニア・フェロー]

○フェロー

氏名	所属(国名)	研究課題	受入期間	受入教員
臼杵 陽	日本女子大学教授	「中東都市社会における人間移動と多民族・多宗派の共存」に関してベイルートを事例とする調査研究	2010.4.1～ 2010.9.30	黒木 英充
COELHO, Olga Ferreira	サンパウロ大学教授(ブラジル)	大航海時代の「宣教に伴う言語学」研究のための非一極集中型研究環境の構築	2010.1.12～ 2010.5.16	豊島 正之
清水 昭俊	一橋大学元教授	歴史的状況における人類学	2009.7.1～ 2011.3.31	宮崎 恒二
扎 布	青海師範大学民族師範学院教授(中国)	アムド・チベット語教材開発に向けた共同研究	2010.5.1～ 2010.9.30	澤田 英夫
新谷 忠彦	東京外国語大学名誉教授	言語調査に基づくタイ文化圏の山地民の歴史的研究	2010.4.1～ 2013.3.31	クリスチャン・ダニエルス
TASHIRO PEREZ, Eliza Atsuko	サンパウロ州立大学准教授(ブラジル)	大航海時代の「宣教に伴う言語学」研究のための非一極集中型研究環境の構築	2010.1.12～ 2010.5.16	豊島 正之
Tumenjargal	内モンゴル大学モンゴル学院教授(中国)	日本語とモンゴル語の比較研究—語彙の構造をめぐって—	2009.10.1～ 2010.9.30	呉人 徳司
中山 和芳	東京外国語大学名誉教授	西洋における日本女性の表象	2009.4.1～ 2012.3.31	宮崎 恒二
BECKWITH, Christopher I.	インディアナ大学教授(アメリカ)	古代東アジア世界に関する言語民族学的研究	2010.5.1～ 2010.8.28	中見 立夫
萬宮 健策	大阪大学世界言語研究センター講師	スインディー語教材開発に向けた共同研究	2009.11.16～ 2010.11.15	町田 和彦

○ジュニア・フェロー

氏名	研究課題	受入期間	受入教員
石森 大知	現代太平洋におけるキリスト教の公共的活動とローカル・ガバナンス	2009.4.1～ 2011.3.31	椎野 若菜
今堀 恵美	社会主義後のウズベキスタンにおける「もの」とジェンダー, イスラーム	2009.4.1～ 2011.3.31	床呂 郁哉
海老原 志穂	アムド・チベット語教材開発に向けた共同研究	2009.11.16～ 2010.11.15	澤田 英夫
尾崎 俊輔	フランス植民地における帰化の研究—アルジェリアを中心に	2009.10.1～ 2010.9.30	河合 香吏
辛嶋 博善	モンゴル国遊牧社会の研究	2008.4.1～ 2011.3.31	河合 香吏
齋藤 久美子	近世オスマン朝下におけるティマール制の研究	2009.4.1～ 2011.3.31	高松 洋一
櫻田 涼子	マレーシアにおける喫茶文化の活性化と創造される僑郷イメージに関する人類学的研究—コピ・ティアムを事例として—	2010.4.1～ 2011.3.31	三尾 裕子
張 盛開	漢語平江方言の音韻及び文法の体系的な研究	2010.4.1～ 2011.3.31	呉人 徳司
常田 道子	タイにおけるムスリム・コミュニティ 他	2010.4.1～ 2011.3.31	西井 涼子
ナラン	内モンゴルの砂漠化が進行している地域の生業活動の持続性に関する研究	2010.4.1～ 2011.3.31	三尾 裕子

氏名	研究課題	受入期間	受入教員
PYTLOWANY, Anna	大航海時代の「宣教に伴う言語学」研究のための非一極集中型研究環境の構築	2010.1.15～ 2010.5.16	豊島 正之
伏木 香織	音楽と「もの」と人の連関性 —「生きる」楽器、バリ島のスリン・ガンブーを例として	2010.4.1～ 2011.3.31	床呂 郁哉
溝口 大助	マリ南部セヌフォ社会の「社会的なるもの」と宗教実践	2009.4.1～ 2011.3.31	河合 香吏
妙木 忍	現代日本女性のライフコース選択に関する研究「身体の展示をめぐる理論的・実証的研究—博物館から観光まで—	2009.4.1～ 2011.3.31	椎野 若菜
山田 勲之	清代康熙年間の雲南麗江ナシ族・木氏土司—中華世界とチベット世界の狭間で—	2009.4.1～ 2011.3.31	クリスチャン・ ダニエルス
RAGI CORDEIRO, Roberta Henriques	大航海時代の「宣教に伴う言語学」研究のための非一極集中型研究環境の構築	2010.1.12～ 2010.5.16	豊島 正之
林 虹瑛	閩南語口語資料の収集およびコーパスのテキスト作り	2009.4.1～ 2011.3.31	三尾 裕子
柳 宗伸	明治期, 文化運動としてのお伽噺に関する研究	2010.4.1～ 2011.3.31	三尾 裕子
渡部 良子	インシャー文献に見るペルシア語書簡儀礼の発達とその継承	2009.12.1～ 2010.11.30	近藤 信彰

[AA 研と外国研究機関との学術協定]

締結年	国名	組織名(和文)	協力する分野
2010	ドイツ	マックスプランク進化人類学研究所(MPI-EVA) 言語学科	人間言語と文化に関する研究
2009	フランス	レユニオン高等美術学校(ESBA Réunion)	インド洋地域に関する芸術及び人文諸科学分野
2008	マレーシア	サバ開発研究所(IDS)	現地研究拠点活動に係る専門分野
2007	ドイツ	ケルン大学アフリカ学研究所	アフリカ言語学, アフリカ人類学
2005	インド	高等コンピューティング開発センター(CDAC)	言語解析, 情報学
2005	フランス	パリ人間科学館(MSH)	総合人間学
2005	レバノン	ベイルート・アメリカン大学(AUB)	人文科学, 社会科学, 自然科学
2005	レバノン	レバノン大学人文科学部第1部(FHS-I-LU)	現地研究拠点活動に係る専門分野
2005	ドイツ	ドイツ東洋学会ベイルート・ドイツ東洋学研究所(OIB)	現地研究拠点活動に係る専門分野
2004	オーストリア	オーストリア科学アカデミー(AAS)	インド学, 仏教学, 文献情報学
2000	インドネシア	インドネシア科学院社会文化研究センター(PMB-LIPI)	文化人類学
1997	ラオス	情報文化省文化研究所(IRC)	人文科学のすべての分野等
1996	イラン	農業計画・経済研究センター(CAPES)	イラン文化・日本文化
1988	マリ	マリ共和国人文科学研究所(ISH)	人文科学のすべての分野等
1988	フランス	チベット言語文化研究所(LCAT)	言語学及びチベット語と日本語に関連した分野
1987	インド	インド統計研究所(ISI)	言語学及びインド語と日本語に関連した分野
1987	インド	インド諸語中央研究所(CIIL)	言語学及びインド語と日本語に関連した分野
1978	カメルーン	国立科学技術研究機構(ONAREST)(現・高等教育・情報科学・科学研究省(MESIRES))	人文科学のすべての分野, 特に社会学, 言語学, 歴史学, 民族学

[研究未開発言語文化の調査事業による派遣者]

派遣年	派遣者氏名(主な派遣先)
2010	神谷 俊郎(南アフリカ)
2009	荒川 慎太郎(イギリス), 新谷 忠彦(ニューカレドニア, フランス, タイ), ペーリ・バースカララーオ(インド), 海老原 志徳(インド), 清水 亨(中国), 河内 一博(エチオピア)
2008	クリスチャン・ダニエルス(中国)
2007~2008	伊藤 智ゆき(アメリカ)
2006~2008	河合 香吏(ケニア, ウガンダ)
2005~2006	角谷 征昭(タンザニア)
2003~2005	陶安 あんど(イギリス, フランス, 中国), 太田 信宏(イギリス, インド)
2001~2003	床呂 郁哉(スペイン, オランダ), 呉人 徳司(アメリカ, ロシア)
1999~2001	澤田 英夫(オーストラリア, インド), 本田 洋(韓国, イギリス)
1997~1999	吉澤 誠一郎(フランス, イギリス, 中国, 台湾), 西井 涼子(タイ, イギリス)
1995~1997	飯塚 正人(エジプト, イギリス), 黒木 英充(シリア, フランス)
1993~1995	新免 康(中国, 独立国家共同体, イギリス), 根本 敬(イギリス, ビルマ)
1991~1993	栗原 浩英(ベトナム, ロシア), 峰岸 真琴(インド)
1989~1991	林 徹(中国, トルコ), 栗本 英世(エチオピア, ケニア)
1987~1989	松村 一登(フィンランド, ソ連), 宮崎 恒二(オランダ, インドネシア)
1985~1987	中見 立夫(中国, モンゴル), 梶 茂樹(ザイール, ケニア, ザンビア)
1983~1985	辻 伸久(中国, 香港), 水島 司(インド)
1981~1983	山本 勇次(ネパール), 新谷 忠彦(ニューカレドニア)
1979~1981	羽田 亨一(イラン, トルコ), 清水 宏祐(アラブ連合, イラン, トルコ)
1977~1979	石井 溥(ネパール), 藪 司郎(ビルマ)
1975~1977	加賀谷 良平(ボツワナ), 湯川 恭敏(タンザニア, ザイール)
1973~1975	福井 勝義(ソマリア), 中嶋 幹起(香港)
1971~1973	内藤 雅雄(インド), 中野 暁雄(モロッコ, 南イエメン)
1969~1971	松下 周二(ナイジェリア), 家島 彦一(アラブ連合)
1967~1969	石垣 幸雄(エチオピア), 守野 庸雄(タンザニア)

[言語研修を実施した言語]

「*」を付した項目は、大阪外国語大学・大阪大学世界言語研究センターの協力を得て研修を実施した言語。

実施年度	実施言語(()内は修了者数を表す)
2009(平 21)	アカン語(8), パンジャービー語(4), モンゴル語(11) *
2008(平 20)	モンゴル語(9), フランス語圏アフリカ手話(10), トゥヴァ語(3) *
2007(平 19)	現代ウイグル語(10), マレー語(10), 広東語(11) *
2006(平 18)	リンガラ語(4), サハ(ヤクート)語(10), 朝鮮語中級(5) *
2005(平 17)	ベトナム語中級(4), シンハラ語(3), ヒンディー語(8) *
2004(平 16)	ビルマ語中級(6), ベンガル語(11), カザフ語(3) *
2003(平 15)	マダガスカル語(11), スンダ語 (5), ベトナム語(11) *
2002(平 14)	ネパール語(8), バリ語(7), タイ語(7) *
2001(平 13)	パシウトゥー語(7), 福州語(10), ムンダ語(3) *
2000(平 12)	アフリカーンス語(6), シャン語(3), ペルシヤ語(4) *
1999(平 11)	フィジー語(4), ペルシヤ語(10), ウルドゥー語(5) *
1998(平 10)	アイヌ語(2), ハヤ語(11), カンナダ語(5) *
1997(平 9)	テルグ語(10), モンゴル語(11), ハンガリー語(7) *
1996(平 8)	タイ語(14), 現代ヘブライ語(12), ヨルバ語(7) *
1995(平 7)	アムハラ語(5), チベット語(25), 上海語(12) *
1994(平 6)	ウオロフ語(9), ヒンディー語(11), トルコ語(22) *
1993(平 5)	朝鮮語(17), グルジア語(17), モンゴル語(17) *
1992(平 4)	ネパール語(12), アラビア語エジプト方言(15), フィリピン語(12) *
1991(平 3)	エストニア語(12), ビルマ語(15), 中国語(13) *
1990(平 2)	朝鮮語(11), インドネシア語(11), ペルシヤ語(14) *
1989(平 1)	ベンガル語(20), ベトナム語(9), アラビア語エジプト方言(15) *
1988(昭 63)	ペルシヤ語(10), トルコ語(16), インドネシア語(16) *
1987(昭 62)	中原官話(10), タイ語(19), シンハラ語(8) *
1986(昭 61)	西南閩話(5), タミル語(12), ベンガル語(8) *
1985(昭 60)	朝鮮語(14), カンボジア語(10), スワヒリ語(8) *
1984(昭 59)	ピリピノ語(12), ヨルバ語(3), トルコ語(15) *
1983(昭 58)	チベット語(12), フィンランド語(21), パンジャーブ語(8) *
1982(昭 57)	アラビア語エジプト方言(12), ハンガリー語(17), フルフルデ語(12) *
1981(昭 56)	ヒンディー語(8), パシウトゥー語(10), 中国語中級(26) *
1980(昭 55)	ネパール語(14), モンゴル語(14), ベトナム語(5) *
1979(昭 54)	ハウサ語(8), ビルマ語(14), タイ語(7) *
1978(昭 53)	タイ語(12), トルコ語(12), ペルシヤ語(13) *
1977(昭 52)	広東語(14), マラーティー語(6), モンゴル語(18) *
1976(昭 51)	ペルシヤ語(10), スワヒリ語(9), ビルマ語(5) *
1975(昭 50)	カンボジア語(8), ベンガル語(12)
1974(昭 49)	朝鮮語(10), チベット語(12)
1973(昭 48)	チベット語
1972(昭 47)	福建語
1971(昭 46)	スワヒリ語, ビルマ語
1970(昭 45)	アムハラ語, ヘブライ語
1968(昭 43)	ベンガル語
1967(昭 42)	朝鮮語

[2010(平成22)年度 科学研究費補助金による研究]

課題名	研究代表者	期間
基盤研究(A)一般		
脱植民地化の双方向的歴史過程における「植民地責任」の研究	永原 陽子	平 19～平 22
Ajaxログのラーニングマイニングによる評価とWeb会話ラボの研究開発	芝野 耕司	平 22～平 24
基盤研究(A)海外学術調査		
レバノン・シリア移民の創り出す地域一宗派体制・クライエンテリズム・市民社会	黒木 英充	平 21～平 24
日本を含む外来権力の重層下で形成される歴史認識—台湾と旧南洋群島の人類学的比較	三尾 裕子	平 22～平 25
基盤研究(B)一般		
クメール、チャム碑文資料に基づくシヴァ教の研究	高島 淳	平 19～平 22
中国文書行政形成過程の研究	陶安 あんど	平 20～平 24
ナイル諸語形態統語論の共時的、通時的比較研究	稗田 乃	平 21～平 23
近代帝王記録の叙述—東アジアにおける“実録”編纂との比較—	中見 立夫	平 22～平 25
碑文コーパスによるビルマ語および周辺少数民族言語の通時的研究	澤田 英夫	平 22～平 25
基盤研究(B)海外学術調査		
中国・ASEAN地域協力構想におけるベトナムの定位に関する研究	栗原 浩英	平 20～平 23
言語・文化調査に基づくイラワジ・サルウィン流域諸民族の歴史の解明	新谷 忠彦	平 21～平 24
北東アジア諸言語の統合性をめぐる類型的・史的比較研究	呉人 徳司	平 21～平 24
基盤研究(C)一般		
コリマ・ユカギール語の記述言語学的研究	長崎 郁	平 19～平 22
ペルシア語書簡術・文章術とイラン・イスラーム文化	渡部 良子	平 19～平 22
イエズス会辞書類データベースに基づく、対訳を経由する語彙画定過程の研究	豊島 正之	平 20～平 22
東アフリカ牧畜民における集団間の友好と敵対のバランスシート: 諸集団共存の重層性	河合 香吏	平 20～平 22
スルー海域世界を中心とする特殊海産物の移動と越境に関する歴史人類学的研究	床呂 郁哉	平 20～平 24
アラビア文字紀年銘に関する基礎研究	高松 洋一	平 21～平 23
オハイアット・ヌトカ語のドキュメンテーション研究およびコーパス構築	中山 久美子	平 21～平 23
台湾中央研究院所蔵イ(ロロ)文字文献の分類・解読・解題	清水 享	平 21～平 23
中国新疆ウイグル自治区におけるイスラーム聖地に関する基礎的研究	菅原 純	平 22～平 24
国際間の語学共学システムの構築に関する研究	林 虹瑛	平 22～平 24
スندیック諸語の態のシステムに関する比較研究	塩原 朝子	平 22～平 25
タイ社会における「共同性」の人類学的研究 —社会運動経験の記憶の生成を通じて—	西井 涼子	平 22～平 25
現代パレスチナ文化の動態研究—生成と継承の現場から	山本 薫	平 22～平 26
若手研究(B)		
ウォライタ語(エチオピア)及びその周辺言語の記述的研究	若狭 基道	平 19～平 22
現代アルメニア・ナショナリティの形成過程	吉村 貴之	平 19～平 22
中東諸国におけるパレスチナ難民の帰化に関する研究	錦田 愛子	平 20～平 22
東アフリカにおけるセクシュアリティの変化と「シングル」の生活戦術の可能性	椎野 若菜	平 20～平 23
延辺朝鮮語の音声学的・音韻論的研究	伊藤 智ゆき	平 21～平 23
ポスト社会主義状況下のモンゴル国の牧畜社会の動態に関する文化人類学的研究	辛嶋 博善	平 22～平 24
中国雲南省白族(ペー族)の白文(ペー文)の分析と解読法の確立	立石 謙次	平 22～平 24
東洋文庫所蔵西夏文文献マイクロフィルムの整理とデータベース化	荒川 慎太郎	平 22～平 24
研究活動スタート支援		
ハム仮説の研究—北東アフリカの諸民族との関連を中心に—	石川 博樹	平 21～平 22
特別研究員奨励費		
アバランシャ語の類型的及び歴史的特徴の研究	山畑 倫志	平 21～平 23

課題名	研究代表者	実施期間
特別研究員奨励費（つづき）		
琉球後波照間方言の研究	麻生 玲子	平 22～平 24
中国南部における水上居民のエスニシティをめぐる文化人類学的研究	長沼 さやか	平 22～平 24
キリスト教と植民地主義に関する文化人類学的研究—東アジアの事例から	藤野 陽平	平 22～平 24
レバノン地域社会の変容と再構築に関する人類学的研究	池田 昭光	平 22～平 24
サハ語名詞句の形態統語的・語用論的研究	江畑 冬生	平 22～平 24
再生産労働の国際移転と台湾漢族の家族・親族の再編をめぐる社会人類学的研究	横田 祥子	平 22～平 24
20 世紀ポルトガル領モザンビークの社会変容—南アフリカ金鉱労働力の供給を中心に	網中 昭世	平 22～平 24

[2010(平成 22)年度 受託研究・受託事業プロジェクト]

プログラム名／題名	研究代表者	実施期間
文部科学省・世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業／ 東南アジアのイスラーム:トランスナショナルな連関と地域固有性の動態 (ISEA)	床呂 郁哉	平 18～平 22

[2010(平成 22)年度 日本学術振興会特別研究員]

氏名	資格	受入教員	受入期間
麻生 玲子	DC1	中山 俊秀	平 22～平 24
山畑 倫志	PD	中谷 英明	平 21～平 23
長沼 さやか	PD	三尾 裕子	平 22～平 24
藤野 陽平	PD	三尾 裕子	平 22～平 24
池田 昭光	PD	黒木 英充	平 22～平 24
江畑 冬生	PD	呉人 徳司	平 22～平 24
横田 祥子	PD	三尾 裕子	平 22～平 24
網中 昭世	PD	永原 陽子	平 22～平 24

[AA 研所員を主任指導教員とする博士学位取得者]

学位取得者名	学位論文題目	授与日
高村 加珠恵	日常的越境空間の認知地図:タイ・マレーシア国境東部における華人社会の考察から	2010. 1. 20
山田 重周	バサリ社会の仮面 —仮面及びその語り口の変化に関する民族誌的研究—	2008. 2. 20
林 虹瑛	台湾閩南語音韻研究 —梧棲鎮閩南語を中心に—	2007. 6. 27
檜垣 まり	タンザニア、ダルエスサラームにおけるスワヒリ歌謡、ターラブの誕生と変容	2007. 6. 27
楯沢 英雄	ゴトン・ロヨン思想 —インドネシア・ナショナリズムの思想として—	2007. 2. 21
神谷 俊郎	バツァ語の記述研究 —その音声、音韻、文法—	2006. 9. 20
古閑 恭子	アカン語アシャンティ方言の研究 —特に音韻を中心として—	2006. 7. 26
結城 佐織	満州語文語における形態と音韻について —『満文金瓶梅』を中心に—	2006. 7. 26
阿部 優子	ベンデ語(バントウ F,12,タンザニア)の記述研究 —音韻論, 形態論を中心に—	2006. 2. 8
李 敬淑	発話速度と促音の生成に関する音響音声学的研究	2006. 2. 8
KARI, Ethelbert Emmanuel	Clitics in Degema: A Meeting Point of Phonology, Morphology and Syntax	2003. 3. 26
黒澤 直道	中国少数民族口頭伝承の研究—ナン(納西)語音声言語の検討による「トンバ(東巴)文化」の再検討—	2003. 3. 26
菅原 由美	19世紀中部ジャワ宗教運動研究 —アフマッド・リファイ運動をめぐる言説—	2002. 7. 24
鄧 応文	1990年代における中越経済関係 —国境貿易を中心にして—	2002. 3. 26
高久 由美	漢字形成史研究—先秦時代の漢字体系における「説文留文」の位置付け—	2002. 3. 26
禪野 美帆	村落と都市の紐帯 —メキシコ, オアハカ州サン・マルティン村のカルゴ・システム	2000. 12. 18
小坂 隆一	A Descriptive Study of the Lachi Language —Syntactic Description, Historical Reconstruction and Genetic Relation—	2000. 6. 21
米田 信子	マテンゴ語の記述研究(バンツー系, タンザニア) —動詞構造を中心に—	2000. 3. 24
榮谷 温子	アラビア語における限定・非限定の意味と機能	1999. 3. 26
SOYSUDA, Naranong	日本語の終助詞「よ」「ね」「よね」について —日本語教育の視点から—	1998. 4. 22
吉枝 聡子	現代ペルシア語の敬語行動に関する社会言語学的研究 —テヘランの場合—	1998. 3. 26
鈴木 貴久子	マムルーク朝時代の料理書『日常食物誌』を中心とするアラブ・イスラーム世界の食生活研究	1996. 3. 25
JOSE, Ricard T.	Food Administration in the Philippines during the Shortage and Occupation, 1942-1945: Focusing on the Rice Countermeasures	1995. 3. 24

[予算・決算]

○ 2010(平成22)年度 運営費交付金予算額(常勤職員人件費を除く)

区分		予算額(千円)
一般経費(研究費)		210,580
特別経費	アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究	61,034
	急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築(通称「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト」(LingDy))	71,400
計		343,014

○ 2010(平成22)年度 運営費交付金予算額配分状況

経費名		配分額(千円)
個人研究費		9,510
客員研究費		1,945
基幹研究	言語ダイナミクス科学研究	* 75,600
	人類学におけるミクロ-マクロ系の連関	3,800
	中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成	* 21,680
	アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求	4,800
既形成拠点	アジア書字コーパス拠点(GICAS)	6,900
	中東イスラーム研究拠点	7,800
IRC 経費		32,000
FSC 経費		* 35,252
言語研修経費		8,190
研究未開発言語文化派遣		2,100
成果等刊行経費		* 17,400
広報等経費		5,550
共同利用・共同研究課題経費		* 15,000
文献資料経費		* 10,695
国際研究集会		3,000
共通経費		9,000
外部委員経費		* 3,400
会議等経費		540
所長裁量経費		5,650
非常勤研究員/特任研究員人件費(基幹研究, 拠点分, 研究センター分を除く)		* 4,871
外国人研究員人件費(基幹研究分を除く)		* 30,069
派遣職員/非常勤職員経費(基幹研究, 拠点分, 研究センター分を除く)		14,949
予備費		13,313
計		343,014

補足:「*」を付した項目は、その一部あるいはすべてを特別経費により実施する。

○ 2010(平成22)年度 外部資金受入額

区分	予算額(千円) / 件数	
科学研究費補助金	基盤研究(A)	32,100 / 4件
	基盤研究(B)	24,600 / 8件
	基盤研究(C)	11,700 / 13件
	若手研究(B)	7,256 / 8件
	研究活動スタート支援	970 / 1件
	特別研究員奨励費	7,400 / 8件
受託研究費・受託事業費	14,000 / 1件	
計	98,026 / 43件	

○ 過去3年間の運営費交付金決算額 (単位:千円)

区分	2007年度	2008年度	2009年度
人件費	460,104	454,515	513,570
物件費	226,916	267,608	278,446
計	687,020	722,123	792,016

[沿革]

1961(昭36)	日本学術会議が、アジア・アフリカ諸国についての研究を進めるための共同利用研究所を設立するよう政府に勧告。
1964(昭39)	アジア・アフリカ言語文化研究所が東京外国語大学に附置。 わが国最初の人文科学・社会科学系共同利用研究所。
1967(昭42)	研究未開発地域への助手等の現地投入を開始。
1974(昭49)	言語研修を本格的に開始。
1978(昭53)	メインフレーム・コンピュータを導入。
1983(昭58)	海外学術調査(当時、国際学術研究)総括班の事務局が置かれる。
1991(平3)	研究体制の抜本的見直しを行い、従来の小部門制(及び1客員部門)から4大部門制(及び1客員部門)に改編。
1992(平4)	東京外国語大学大学院地域文化研究科に設置された博士後期課程の教育に所員が参加。
1995(平7)	文部省から「卓越した研究拠点(COE)」に指定。
1996(平8)	COEとしての初の国際シンポジウム「東南アジアにおける人の移動と文化の創造」を開催。
1997(平9)	附属情報資源利用研究センターを設置。
2001(平13)	中核的研究拠点形成プログラム(2002年度に文部科学省科学研究費補助金特別推進研究に移行)「アジア書字コーパスに基づく文字情報学の創成」が発足。(～2005年)
2002(平14)	旧西ヶ原キャンパスから現在の府中キャンパスに移転。 文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「資源の配分と共有に関する人類学的統合領域の構築—象徴系と生態系の関連をとおして」が発足。(～2006年)
2004(平16)	東京外国語大学、国立大学法人になる。
2005(平17)	複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置。 フィールドサイエンス研究企画センターを設置。 中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始。 中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設。
2006(平18)	文部科学省「世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業」により「東南アジアのイスラーム:トランスナショナルな連関と地域固有性の動態」(略称 ISEA)を開始。
2007(平19)	コタキナバル・リエゾンオフィスをマレーシア・サバ州に設置。
2008(平20)	「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」プロジェクトを開始。
2010(平22)	文部科学省により共同利用・共同研究拠点(拠点名:アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究拠点)に認定。

[歴代所長]

岡 正雄	1964～1972	池端 雪浦	1995～1997
徳永 康元	1972～1974	石井 溥	1997～2001
北村 甫	1974～1983	宮崎 恒二	2001～2005
梅田 博之	1983～1989	内堀 基光	2005～2006
山口 昌男	1989～1991	大塚 和夫	2006～2009
上岡 弘二	1991～1995	栗原 浩英	2009～